

「知の攪乱」が再生する「生と性」

—ジェンダー論『多性研究』から探る教養教育の手法と意義

Life and Sexuality Reclaimed by the Disturbance of Knowledge

— A Search for Techniques and Meanings for Liberal Studies through Gender Studies

山口＝内田 雅克

YAMAGUCHI=UCHIDA, Masakatsu

Many people have only a shallow understanding of the concept 'gender,' or it has been distorted to further some purpose. This paper, in the process of presenting a true 'gender-free' redressing of some misunderstandings, tries to show what the gender education here at Tohoku University of Art and Design has brought to the students by focusing on their responses to the class.

'Gender' does not simply remain within the negation of the unnatural and unequal dichotomy of both sexes. Affirming oneself can be born from the attitude of understanding others, which then leads to the positive thinking regarding his/her own life and sexuality. In this process the author can find a meaning of liberal studies, and what's more can present a practical example of the training of 'thinking.'

Keywords: ジェンダー、他者理解、教養科目、gender, understanding of others, liberal arts

はじめに

「この授業ほど、（絵の授業は別として）成績のために勉強しているわけではないと思えた授業はない。私の中にある考え方、他人のとらえ方が本当に変わった。とても面白い、ためになる授業だと思う。ぜひ、色々な人に受けてもらいたい」、学修アンケートに書かれたこの言葉を見たのは、担当初年度2009年後期の授業を終えて、新年度を迎えた会議の時であった。もっとも印象に残った科目の最上段に『多性研究』があり、驚きと安堵感を覚えた。長年英語教育に従事し、本学でも英語を担当してきた筆者にとって、それははじめての試みであった。もう一つの専門分野として選択した「ジェンダー学」を学ぶために再び大学院の門を叩いて5年、新たな分野で博士号を取得したばかりの時に担当を依頼された。ジェンダーに関する講義をするのもはじめてであり、大教室での授業も経験がない。ひと夏の準備期間そして毎週の準備と修正は手探り状態であった。だからこそこうした感想を見て、ほっと胸を撫で下ろした。そして今後の改善に向けての第一歩として、実践報告をまとめた次第である。

「ジェンダー」ということばは、浅はかな理解あるいは策略によって曲解されている。「ジェンダー・フリー」という化け物」「フリーとは男と女がいっしょに着替えること」「ジェンダーということばの使用は好ましくないのでは?」「多性?ああ、中性の存在か」「同性愛者

を差別するなということ？」一公人、そして身近な教職員の発言である。「ジェンダー」は誤解と軽視のなかにある。本稿では、これらの誤解を是正し、眞のジェンダー・フリーを示すなかで、ジェンダー教育がここ東北芸術工科大学の学生に何をもたらしたのかを、学生の授業へのレスポンスを基に見せることを試みる。本稿では、とくにレスポンスやアンケートに書かれた学生の声を読んでいただきたい。

ジェンダー学は、単に不自然・不平等な男女両性の二分の否定に止まるものではない。他者を理解しようとする姿勢から「自己の肯定」は生まれ、やがてポジティブに「生と性」を捉えなおしていく。さらに知的好奇心を喚起し、思考力と文章表現力を鍛えることに、大学における基礎教育としての意義を見いだせると考える。

1. 授業『多性研究』

本節では、授業『多性研究』の担当までの経緯・主旨・内容・構成・資料の選択や提示の方法・受講生の構成、そして学習マナー指導について述べる。

(1) 担当経緯と主旨

『多性研究』は、全学教養科目のなかの「他者理解」科目群の一科目である。『多性研究』は、この科目の前任者である山形大学河野銀子氏による命名である。河野氏は「広い視野で人間を捉え、いくつもの生き方があることを理解するためには、複眼的な思考やクリティカルな思考が必要です。いろいろな視点で物事を捉えることができるなどを知ると共に、物事を捉えるときの自分自身の「思考のくせ」に気づいていけば、他者理解ができるようになるでしょう」と、目標を設定している。さらに授業概要には、「『多性研究』とは、この授業のために考えられた言葉です。わたしたち一人一人は、それぞれの個「性」もって生きています。それらは、人間のさまざまな生き方（=多様性）となつて現れます。けれども、日常生活の中では“常識”にとらわれて、人間のもつ多様性を見失いがちです。あるいは、無意識のうちに、「異質」なものを排除してしまっているかもしれません。この授業では、まず、人間の生き方を、時間軸や空間軸の中に位置づけ、いく

つもの生き方がある（あった）ことを学習します。そして、「いくつもの他者」への理解を深めながら、他者を理解できる「自分」に出会っていただけるような授業にしたいと思います」と、明快に主旨が説明されている。

河野氏の退任に伴い、筆者が英語以外の専門であるジェンダー学を活用し、この科目を継承するに至った。河野氏の「いくつもの生き方」を見つめ、そこから「いくつもの他者」を理解する姿勢を養うという主旨・目的を引き継ぎながら、ジェンダーを視座とする方向性を明確にした。ジェンダーが至近な問題として学生に訴えかけられるテーマであり、興味を喚起する資料を用いることができるというメリットにより、内容の具体化と平易化が可能になるとを考えた次第である。さらに「自らの考え方や生き方、文化や言語を他人に伝え、他人の考え方をしっかりと理解できるよう、学生の認識を高める」という他者理解科目群の目的の焦点を絞り込んだ。「あたりまえ」あるいは「弱者」だからと不可視にされたり、看過されたりした人々の痛みを共有し、問題の本質を探る試みとした。

(2) 内容

まず「ジェンダー」の定義を確認しておきたい。「ジェンダーとは肉体的性差に意味を付与する知なのである」¹。これはアメリカの歴史家ジョン・スコットによる定義である。スコットは女性史にジェンダー概念とポスト構造主義という理論を適用し、ジェンダーに強力な分析用概念としての役割を与えていた。すなわちジェンダー・フリーとは、この知からの解放を意味する。そこに浮かび上るのは、ジェンダーの枷を取り払った一人ずつの個性である。『差異を生きる』の著者宮崎かすみは、われわれがそれに基づいて思考する「男/女、日本人/外国人、異性愛/同性愛、健常者/障害者」といった二項対立の概念が、「西欧近代が国民国家として編制されたとき、『市民』を定義するために措定しなくてはならなかった『市民ならざるもの』を『他者』としてつくりあげたことに由来する、きわめて歴史的かつ近代的な現象にすぎない」と暴く²。宮崎の言う「概念の境界線に搖さぶりをかけてやろうという知的好奇心」と、「その境界線が引かれることで被害の立場におかれる人々への理解と共感」を育むことこそが、

ジェンダーを視座とした『多性研究』が目指すところである。「本質」や「常識」といったことばによって問題視を免れる境界線が生む抑圧や苦悩、あるいは力によって黙殺された苦悩—それらの届かぬ叫びに耳を傾けようとする姿勢を学生のなかに育むことを、ジェンダー論に期待できると考える。そしてそのプロセスにおける「思考」の訓練は、さらなる学問の広がりと「生」のエンパワーメントを可能にする。

個々の詳細は「2 問題提起とレスポンス」に後述するが、具体的な15週の内容は以下〈表1〉である。(「」はタイトル、〈 〉は使用機器・教材など)。こ

のシラバス作成にあたっては、『図解雑学ジェンダー』、『お姫様とジェンダー』より多くのヒントを得ている³。とくに若桑みどり氏の川村学園女子大学での実践は、示唆に富るものであった。

オリエンテーションでは、具体的な資料を用いて授業の目標を確認する⁴。「自然・当然」という基準、偏見、あるいは権力・暴力といった力により、不可視にされている苦悩が存在する。その声に耳を傾け、しっかりと受け止め、その起因、解決、そして自らができる支援を模索していく—それが本授業の目標である。

表1 2009年度シラバス

週	内 容
1	オリエンテーション 「何を、いかに、何のために学ぶのか」
2	「可愛い女」と「金持ち男」〈DVD映画『シンデレラ』〉 ジェンダー学入門①—性差・役割
3-4	「女らしさって？ 男らしさって？」〈アンケートを基に〉 ジェンダー学入門②—女性性と男性性
5	「ワカメvs.ジョー」〈DVDテレビコマーシャル、少年漫画〉 メディアとジェンダーニジエンダーの刷り込み
6	特別講師：渡部周子氏 「〈少女〉はいかに作られたか」—国家とジェンダー〈power point〉 歴史とジェンダー①—渡部周子著『〈少女〉の社会史』を基に
7	「〈少年〉はいかに作られたか」—戦争とジェンダー〈power point〉 歴史とジェンダー② —拙著『大日本帝国の「少年」と「男性性」 少年少女雑誌に見る「ウィーグネス・フォビア』を基に
8	学習のまとめと試験①
9	「エリスと智恵子」〈DVD画ニメ『舞姫』〉 文学・芸術とジェンダー
10	「事実を、傷みを……」〈講演録、新聞記事など〉 性暴力・性奴隸制
11	「はるな愛とオノ・ヨーコ」〈DVD映画 Hedwig〉 セクシュアリティとジェンダー①—性的マイノリティへの人権
12	特別講師：エスマラルダ氏 「あの街からDrag Queen登場」〈DVD,OHP〉 セクシュアリティとジェンダー②—「多様な性」を生きる
13	「もうシンデレラじゃない！」〈DVD映画 Ever After〉 真実のジェンダー・フリー①—知力・体力・自立
14	「尊重」〈DVDドラマ Around 40、漫画『ルネッサンス』〉 真実のジェンダー・フリー②—誰もが人生を謳歌できる社会へ
15	学習のまとめと試験②

(3) 構成

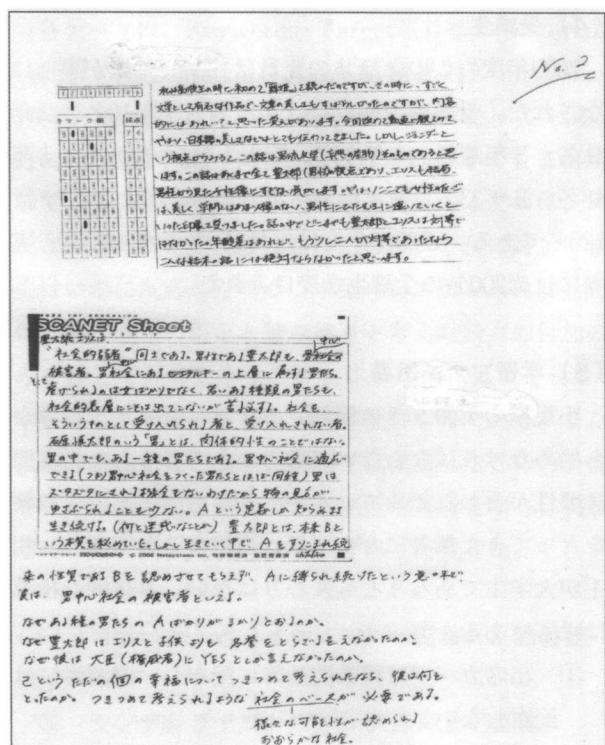
表2 授業の構成

時間(分)	内 容
00:05	出席カード記入(スキヤナシート使用)
05:20	前時の質問への回答 学生からのレスポンスの共有(ハンドアウト使用)
20:25	本時の目標・学習内容の紹介
25:70	問題提起
70:80	カード記入による学生のレスポンス

1) スキヤネットシート(図資料1)の利用

氏名・学籍番号の記入による出席確認と授業の感想・コメントを書くことができ、さらに出席はスキヤナで処理ができる。感想・コメントを読む時間に変わりはないが、少なくとも出席管理に要す時間はかなり省くことが可能である。カード配布は授業の冒頭を行い、遅刻者には配布をしない。また途中退室は一切禁止し、カードは一人一人終了時に教員に手渡して提出させた。

図資料1 出席・レスポンスカード記入実例



2) 前時の質問への回答

前の時間のレスポンスに書かれた質問への回答から授業を始める。質問者には挙手をさせ、顔を確認する。1対多人数という匿名化してしまう学習環境に変化をもたらす効果も考慮する。

3) 学生からのレスポンスの共有

学生たちから寄せられた前時の授業に対する感想・コメントのなかからしっかりと書かれたものを10~15選び、ハンドアウトにして配布する(図資料2)。内容から分類し、一つ一つ読み上げながら他の学生の考え方などを紹介する。レスポンスの最後は本時のテーマへと結びつけた。実際にはレスポンスに対するレスポンスが生まれ、学生間でのコミュニケーションも成立了。

4) 本時の目標・学習内容の紹介

難解な理論も登場するため、授業冒頭において本時の学習内容の見取り図を提示する。

5) 授業プリント

毎時間授業用のプリントを用意した。キーワードを列举し、その他の板書を書き込む形にした(図資料3)。

図資料2 レスポンス

図資料3 一授業プリント

<p>2 10/5 ジェンダー学入門 ① 「シンデレラ」 ・シンデレラが見せるもの 一 性差・役割の構築、美醜 ・?「性別」</p> <p>(1) 「シンデレラ」鑑賞 80分 * 自由な感想をカード上半分くらいに記入</p> <p>(2) Response Interview 受講者の観た「シンデレラ」</p> <p>(3) Response 分析 1) 美醜 </p> <p>2) シンデレラ・コンプレックス</p>	<p>(4) ?「性別とは」 1) 性別とは</p> <p>2) 性の多様性</p> <p>性染色体が男女の分化を保証する</p>  <p>多様な染色体の性</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>性別</th> <th>性染色体(概要)</th> <th>発生率</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ターネー女性</td> <td>45,X 45,XO(異常X) 45,X/46,XX モザイクなど</td> <td>2000人に1人</td> <td>XOまたはXO(ゼロ)と表現することもある。外見は女性ながら性としてできることが多い。卵巣の未癡熟、無月経、第二次性徴(乳房等)の未開発といった特徴があるが、ホルモン療法によりかなり解消できる。</td> </tr> <tr> <td>クラインフェルター男性</td> <td>47,XXX 48,XXXX 48,XXYYなど</td> <td>400~1000人に1人</td> <td>出生時の外見、卵巣は外見的な女性だが、種子管、卵子子宮等の性器官は正常より、精巣周辺に腫瘍の発育や高身長等がみられることがある。</td> </tr> <tr> <td>XYY男性</td> <td>47,XYY</td> <td>1000人に1人</td> <td>高身長がみられる以外には、外見・外性器等特に異常なことは性別辨別性と変わらない。いわゆる「超男性(P1)の象徴」</td> </tr> <tr> <td>XX男性 XY女性</td> <td>48,XX 48,XY</td> <td>まれ</td> <td>Y染色体にのみ性決定素SRYの転写・文頭によって生じるか、性別不明の場合も多い。難産等はさまざま。</td> </tr> </tbody> </table> <p>6</p> <p>(5) Response (カード下半分くらいに記入) ①「女らしさ」「男らしさ」って……「 イメージする形容詞、場面、しぐさなど何でも…」 ②「女(男)であるこの模得」 女って(男って)「 」が得だよな…」</p> <p>7</p>	性別	性染色体(概要)	発生率	特徴	ターネー女性	45,X 45,XO(異常X) 45,X/46,XX モザイクなど	2000人に1人	XOまたはXO(ゼロ)と表現することもある。外見は女性ながら性としてできることが多い。卵巣の未癡熟、無月経、第二次性徴(乳房等)の未開発といった特徴があるが、ホルモン療法によりかなり解消できる。	クラインフェルター男性	47,XXX 48,XXXX 48,XXYYなど	400~1000人に1人	出生時の外見、卵巣は外見的な女性だが、種子管、卵子子宮等の性器官は正常より、精巣周辺に腫瘍の発育や高身長等がみられることがある。	XYY男性	47,XYY	1000人に1人	高身長がみられる以外には、外見・外性器等特に異常なことは性別辨別性と変わらない。いわゆる「超男性(P1)の象徴」	XX男性 XY女性	48,XX 48,XY	まれ	Y染色体にのみ性決定素SRYの転写・文頭によって生じるか、性別不明の場合も多い。難産等はさまざま。
性別	性染色体(概要)	発生率	特徴																		
ターネー女性	45,X 45,XO(異常X) 45,X/46,XX モザイクなど	2000人に1人	XOまたはXO(ゼロ)と表現することもある。外見は女性ながら性としてできることが多い。卵巣の未癡熟、無月経、第二次性徴(乳房等)の未開発といった特徴があるが、ホルモン療法によりかなり解消できる。																		
クラインフェルター男性	47,XXX 48,XXXX 48,XXYYなど	400~1000人に1人	出生時の外見、卵巣は外見的な女性だが、種子管、卵子子宮等の性器官は正常より、精巣周辺に腫瘍の発育や高身長等がみられることがある。																		
XYY男性	47,XYY	1000人に1人	高身長がみられる以外には、外見・外性器等特に異常なことは性別辨別性と変わらない。いわゆる「超男性(P1)の象徴」																		
XX男性 XY女性	48,XX 48,XY	まれ	Y染色体にのみ性決定素SRYの転写・文頭によって生じるか、性別不明の場合も多い。難産等はさまざま。																		

6) 資料

資料はプリントおよび映像、パワーポイントなどを使用した。学生を80分間引きつけるためには、資料の工夫が重要な鍵を握る。

7) カードによるレスポンスの記入

〈図資料1〉にあるように、カードの左側は出席確認用だが、右側は学生にその時間の感想などを自由に書かせた。多人数講義が陥りがちな授業の一方通行化を阻止することを目的とした。その効果などについては後述するが、〈図資料1〉および〈図資料2〉に載せたカードの文字数は平均的なものであり、裏面までぎっしりと書く学生も多かった。

8) 出席カードの提出

感想・コメントの記入を終えた学生に、カードを一人一人教員に直接提出させた。この機会に学生からは、質問・相談などを受けることができ、教員側からも(一所懸命な記入に対して)「ありがとう」あるいは(帰りの夜道に)「気をつけて」と声をかけるようにした。

(4) 受講生

2009年度のこのクラスの定員は120名、抽選が事前になされた。受講生の構成は、男27名（1年10名、2年9名、3年6名、4年1名、院生1名）、女93名（1年48名、2年33名、3年10名、4年1名、院生1名）、計120名である。翌2010年度は定員150名となったが、実際には約200名の受講生を受け入れた。

(5) 学習マナー指導

小規模の英語クラス同様、まずは学習マナー指導から始めなければならない。FDのなかでこうした指導の必要性が言われ始めているが、長年中学・高校で教鞭をとってきた筆者にとっては、当然のことであり、相手が大学生であろうとも変わりはない。具体的な指導は以下である。

- ① 出席カードは授業開始時に配布し、遅刻者には配布しない。
- ② 途中退室は一切禁止し、カード提出は各自教員に手渡しとする。

- ③ 欠席4回で単位は不認定とする。
- ④ 居眠り・私語・携帯電話操作・他の勉強をするなどといった行為は厳しく禁じる。
- ④に関して実際はほとんど注意する必要はなかった。しかし「居眠り」については、「迷惑をかけていないから……」と軽く考える学生もあり、その後も何回か丁寧な説明と注意を繰り返した。授業における教員と学生の関係は、1対多数ではなく、教員は一人一人に話しかけている。つまり1対1で話しているのと同じであると説いた。居眠りをするという行為は、大勢の中ではたいしたことではないように思えるかもしれないが、1対1であれば相手をどのような気持ちにさせるのかを考えさせる。そしてきちんとしたマナーを守れないようでは、他者理解などできようはずもないことを確認した。後半では、このような注意は不要となった。

2. 問題提起とレスポンス

本節では、テーマごとに内容を詳述していく。テーマによっては2コマを要したり、学生の理解度から整理や説明を再度要したりする場合もあり、必ずしも1コマ1テーマと対応してはいない。

各テーマは、Keywords・Target（目標）・Materials（資料）・Presentation（講義・問題提起）・Response（疑問・感想・意見）という項目から成っている。Presentationでは、学生への投げかけをそのまま再現している。学生が持つ固定観念を攪乱するために、何をどのように学生に投げかけたのか。それに対して学生はいかに反応したのか。学生のレスポンスに関しては、誤字脱字の訂正と読み易さを考えた読点の付加のみを施している。学生のコメントの前には*を付し、字下げしている。数値は2009年度のものである。また紙幅の制約から、資料に関しては使用したもの一部を、レスポンスは授業で取り上げたものを中心に掲載している。尚、アンケートはすべてを載せた。

（1）「可愛い女」と「イケメン」—囚われた価値観

Keywords

- ① シンデレラ・コンプレックス ② 美醜
- ③ 性別 ④ 性の多様性

Target

「性差と役割」、そこで大きく作用する外見の「美醜」について考える。

Materials

- ① 授業プリント ② DVD『シンデレラ』⁵

Presentation

事前に見せたDVD『シンデレラ』に対する感想の分析から始める。もっとも学生が注目したのは、王子・シンデレラの容姿と義母・姉たちの容姿の明白な美醜の対比である。美しい人は心も綺麗であり、醜いものは心も汚いという解りやすい図式が子どもに刷り込まれる。タイトルは「世界名作アニメ」である。

そして容姿による判断への注目も見られた。王子が所詮シンデレラを容姿で判断していること、陛下が義母の顔を見てダンスを断っていることなどの分析がなされた。また美しさと合わせて上品さが女性に求められていること、さらに女性らしい体型を象徴する「胸」「腰」などの強調が指摘された。

女子学生が「美醜」の次に指摘したのは、シンデレラの「おとなしく従順な態度」「受身な姿勢」である。批判的な言及が女子に13名、男子では2名であった。一方で男子5名が、「きれいな女は妬まれる」というシンデレラに同情的なコメントを記している。これは女子学生には見られないコメントであった。

さらに「美醜」について考えさせる。人気お笑いタレントは「醜さ」や「太さ」を売り、一方で「かわいい」女性タレントがいる（図資料3）。「醜い」容姿は笑いの対象なのであろうか。そこに支配するのは異性愛に囚われた視線である。女性は「美しくなければならぬ」という強迫に拘束され、摂食障害などに至る事例もある。また「モテない男」を鬱屈が包囲する。容姿が美しく描かれるのは男性である王子も同じである。そして財力・権力のある男が美しい女を獲得する、美しい女の獲得はそうした力の証であるという『シンデレラ』が見せた図式は過去の遺物とは化していない。

シンデレラの「受け身」な在り方、すなわち他者に自分の人生の幸福や方向をゆだねようとする傾向は「シンデレラ・コンプレックス」と呼ばれる。「女の子は美しく従順であれば、地位と金のある男性に愛されて結婚し、幸福になれる」という意識は、建前で男女の平等が達成されてもいまだに再生産され続けている

表3 「女らしさ」

順位	項目	延べ数
1	やさしい・おとなしい・おしとやか・しおらしい・静か	63
2	スカート・レース・フリル・化粧・ハイヒール・長髪	45
3	やわらかい・なめらか・つややか・曲線	28
4	家事・出産・母性・育児	21
5	弱い・華奢・細い・小さい	15
6	かわいい・きれい・愛嬌・笑顔	13

中世からのジェンダーの刷り込みである。ジェンダーとは、自分の生き方を考えることに他ならない。

そもそもシンデレラと王子が見せる「性別二分」は、はたして自明なことなのだろうか。性別自体があいまいさを残すものである。性を決定する染色体が多様(半陰陽などの存在)であり、また文化的に見ても性の二分は必ずしも普遍的ではない(文化によっては第三の性が存在する)。同性愛や典型的な男性・女性の身体を持たないインター・セックスなどの多様性が不可視にされたり、劣位に置かれたりするのは、生殖能力の有無という一つの基準に因る。作られた規範・慣習に囚われていることに起因する差別に他ならない。

(2) 「らしさ」—構築主義と「女性性・男性性」

Keywords

- ① らしさ ② ホルモン神話
- ③ 生物学的決定論 ④ 草食系男子
- ⑤ 女性学・男性学 ⑥ 本質主義・構築主義
- ⑦ クィア理論

Target

「女らしさ」「男らしさ」を本質と見るのではなく、構築されたものとして見る。

Materials

- ① 授業プリント
- ② 事前に取ったアンケート結果
- ③ 草食系男子関連の記事

Presentation

事前に取った「女らしさ」「男らしさ」に関するアンケートのフィードバックから始める。アンケート質問項目は以下である。

表4 「男らしさ」

順位	項目	延べ数
1	がっかりした体格・たくましさ・筋肉・肩幅・力	78
2	決断力・頼りがい・包容力・潔さ・リーダーシップ・根性・忍耐・寛大	59
3	高身長・大きな手足	15
4	低い声	10
5	短髪・髭	10
6	スポーツ	5

① 「女らしさ」「男らしさ」ということばからイメージするもの・こと

② 「女であることの損得」「男であることの損得」
以下の表では、同義または共通のイメージを有す項目はまとめている。

「女らしさ」とは学生たちにとって何であるかを、
(表3)が示す。アンケート結果に男女差はほとんど見られず、圧倒的に多いのは、内面的・性格的なやさしさやおとなしさである。それに続くのは装飾的なものである。装飾品によって、あるいは躰によって「女らしさ」という役割が作られるこをアンケートは見せている。はたしてそれらは誰にとって都合のよいものなのか。異性である男性が求めるもの、そしてそれに応える女性の相互作用が「女らしさ」を作り出している。

21世紀の大学生がいまだにこうした意識を有していることは、「らしさ」がいかに文化的に根強く再生産され続けているかを物語る。そして表面的に男女の平等や共同参画が唱えられても、ジェンダー規範は、その拘束力を失ってはいない。

(表4)は「男らしさ」である。圧倒的なのは体格である。男子が体を鍛えようと必死になるのも無理はない。しかし、遺伝や体质もあり、骨格が細い男性もいる。3, 4, 5も同様である。背が高い男性もいればそうでない人もいる。声が低い男性もいれば、高い男性もいる。そしてスポーツが得意な男子ばかりではない。身体や運動能力によって序列化され、さらに2に示されるような性格を備えるとなると、「男らしさ」の要求は過酷である。そこにプレッシャーも生じる。こうした抑圧に起因すると思われる男子に見られる意欲の

表5 女子学生から見た「女性の損」

	項目	延べ数
1	出世（仕事）ができない・無能・「女だから…」という扱い	9
2	非力・劣る運動能力	6
3	外見の重視・化粧/身なりの苦労	6
4	生理	5
5	危険との遭遇	5
6	上品さの強要	4
7	結婚・出産・育児の強要	4
8	兄弟にはない家事手伝いの強要	3

表7 男子学生から見た「男性の損」

	項目	延べ数
1	弱さ/優柔不断/非力などを責められる	5
2	主婦になれない	3
3	責任/期待が大きい	2
4	「男性限定」がない	2

欠如や感情の暴力的な爆発などは、深刻な問題である。

次の質問は、「男女の損得」である。ジェンダーの二分によってどのような損得を感じているのか。そこに何が読み取れるのか。

「女性の損」には〈表5〉のような回答が寄せられた。男女共同参画が実現されつつあるとはいえ、「頑張っても、女だから…」という壁はいまだに女子学生の前に立ちはだかっている。彼女たちの目の前に並ぶ教員のほとんどが男性であるという現実は、Hidden Curriculum（教科同様の教育効果をもたらすと考えられる人員構成や教師の言動などといった隠れたカリキュラムを指す）の一つである。自分たちが専門を極めても、こうして研究職に就ける可能性も低い。また男性の視線に「晒され」、「拘束され」た存在としての女性像も映し出されている。

〈表6〉は「女性の得」である。責任ある仕事を任せられない、出世できないなど否定的な外圧に対する反動ともいえよう。おとなしくしていれば優遇され、失敗を責められることもない。しかし、そこにはやりがいの剥奪、また若い女性だけの特権という落とし穴が存在する。この女子学生の「気楽さ」は、男子への抑

表6 女子学生から見た「女性の得」

	項目	延べ数
1	優遇される・やさしくされる・守られる	31
2	笑顔でごまかせる・無責任/言い訳/愚かが許される	17
3	荷物持ち/力仕事をしないで済む	11
4	おしゃれ/化粧ができる	7
5	扶養してもらえる・男に任せればよい	5
6	マラソン距離が短い	4

表8 男子学生から見た「男性の得」

	項目	延べ数
1	身体能力が高い/力がある	6
2	立場が上	2
3	下品/過激でも許される	2

圧や厳格さと表裏一体を成している事実も見据えておかなければならない。

男子の回答には、「かわいいと優遇される」「教師が男だとちやほやされる」「友達の輪がすぐできる」などがあった。外見による差別、男性教師の女子学生への態度、穏やかな対人関係の生成を阻止する男性間の競争意識の先行などの問題が映し出されている。

男子学生の思う「男性の損」は〈表7〉である。

その他単独の回答には、「地位学歴で判断される」「マラソン距離が長い」「親の面倒を見る」「スポーツをしなくてはいけない」などがある。いずれも男子にとっての「抑圧」である。男子も弱さを見せてよい、力がなくてもよい—そんな見方が容認されてもいいのではないか。抑圧には連鎖の危険性が潜在する。

女子学生の回答には、「周囲の目が厳しい」「かわいい物が好きだとオカマと言われる」「女性に厳しいとひどい奴と言われる」などがあった。一般的な社会では、境界線の逸脱には否定的な評価や制裁が伴う。

「男性の得」は〈表8〉である。「男性の得」が見せる身体的な力の優越、上位の立場などの思いこみは女性蔑視に繋がる。対女性への暴力は、こうした意識と

無縁ではない。さらに「弱さの身勝手な容認願望」ではない男性ジェンダー規範の打開は、喫緊の課題と言つてよい。

回答の中には、「自分が男か女か分からぬ状態です。どっちでもあるのか、どっちでもないのか、どちらなのか。GID(MTF)であることは分かりますが。損得を考えたことはありません」というものがあった。これはその後の授業の一つの兆しであった。誰かに伝えたいが、伝えられること一心の叫びーが聞こえ始めた。

「らしさ」とは、特定の性を持つ人に期待される行動様式、そこに反映する価値判断である。社会的に他者から期待された役割を自分の役割として内面化していく⁶。「らしさ」を議論の俎上に載せるジェンダー学とは、「人類が長い間につくってきたあらゆる性差別の仕組みを知り、それがいかに男女を束縛しているかを見るようにし、それをどうすれば変えることができるかについての様々な思想や方法を教える学」である⁷。

女性学に焦点を当てた女性学は、それまでの偏見や蔑視を免れた新たな女性像を探る試みであり、飾りや、従属性の存在ではなく、主体性を持って生きることを説く学問に他ならない。「ガーリー(girly)」という少女っぽいファッションが人気であり、「女性らしさを追求したい」といった女子学生が少なからずいる現状は、女性学を過去の学問とはしない。

そして男性学とは、従来の美化された「男らしさ」に関する自分や社会の思い込みを解体し、男性の特性とその由来を問い合わせる学問である。具体的には、男性の優越志向・権力志向・所有志向、企業や運動部の抑圧的なタテ社会、女性差別、DV、性暴力、男性内の暴力・序列、中高年男性の自殺者の多さなどを問題視する⁸。

そしてこれら女性学や男性学の理論的な基盤は構築主義にある。「性欲」「性別」「女性性/男性性」といった言葉の指し示す対象が、人間の肉体の側にあらかじめ実在するものと見る実在論（本質主義）に対抗し、あたかも実在しているかのように見せかけられているに過ぎないと考える非実在論の視点が「構築主義」である。その代表的な論者の一人M・フーコーは「絶対的な真理」を否定し、真理とされる用語や理念は社会に偏在する権力構造のなかで形成されてきたものとした⁹。さらにJ・バトラーは、ジェンダーを文化的に規

定された構築物と捉え、生物学的な性差さえもジェンダーによって規定されるものだとする。バトラーの企ては、二項対立を脱構築する「攪乱」である¹⁰。

バトラーにも通じるのがクィア理論である。クィアとは本来「変態」「奇妙」という侮蔑語であるが、常識を信じて疑わない人達こそ「奇妙」な人々であるという逆説として用いられる。そこに期待されるのは、囚われている「常識」を剥ぎ、いまある世界を攪乱し、新たな世界の可能性を開くという実践である。

こうした構築主義に対して、本質・本能を拠り所とする反論—バックラッシュ—が登場している。だが、そこで根拠とされるホルモンや脳における両性の違いに確かな根拠など存在していない。

Response

自分の身近な認識の変化には以下のようなものがあった。（下線は筆者、以下同様）

*今日聞いた中で一番驚いたのは、「本能というのは脳のなかのほんの一部でたいした働きはない」ということです。「○○は本能で～」という言葉はよく聞くので、てっきりそれが本当のことだと思っていました。「女は本能的に子育てや家事をする」といわれることがたまにありますが、それがすごく嫌だと感じていたので、実際は社会の作り上げたイメージだと知って安心しました。

*今まで私は「女なのに」「男なのに」という言葉を使っていた。しかし、その行為を冷静に考えてみれば、確かにおかしな事だと今回の授業を受けてみて思った。自分の周りを見てみれば平均より背の小さな男性だって足の大きな女性だってたくさんいる。

*男らしさ・女らしさには自分の好みや偏見も入っているのだと思った。その固定観念は昔から強いのだと分かった。私たちは互いに抑圧していたのかなと思った。女性だけでなく、男性にも強い負担があり、今もそれは続いているのだと思いました。既成概念をこわしていくのは新たな世界が広がっていくと思いました。

*今回の授業の中で他の人の男らしさ・女らしさの意見を聞いて、自分が持っている“男らしさ”“女らしさ”とかなり合致している所もあり、これだけたくさん的人がいる中で、“男らしさ”“女らし

さ”が共通しているということは、わたしたちは自分が考えているより社会的・文化的に作られた「らしさ」というものに縛られて生きているんだなと、ということを強く感じました。積極的に“あたりまえ”的ことを疑うことが大切なのだと思いました。

*最後に聞いた「クィア理論」というのが一番興味深い話だった。私たちのようなものの作り手にとっては「クィア(ヘンタイ)」は悪い言葉ではないようにも思う。

*今まで何も思わず、「男性は背が高い」と考えていた。わたしには兄がいるが、わたくしより背が低い。それは兄が病気にかかり飲んでいる薬の副作用だと聞いたことがある。わたしは兄と男性を背の高さだけで分けて考えていたかもしれない。また女という性別が最近できたということをはじめて知った。昔は、女は家事や育児で公の舞台には出られなかつたことは知っていたが、女=できそこないの性別というのは非情に不愉快だと思った。しかし、今でもその考えがまだあると思う。(1女)

*いままる社会では、いろいろなものが積み上げられて「男」「女」という二分化ができあがっていることを気がつくことができた。しかしすでに積みあがってしまった常識と思われるものは、なかなかくずすことが難しいと思う。「らしさ」とは何なのか。その「らしさ」は全員にあてはまるのか。そういうことをしっかりと考えたうえで、個性というものを大事にしていかなければならないと思った。

*今までずっと男女差別をする世の中が嫌でした。こんな世の中で同性愛者の人達を誰かが認めるのだろうかと思っていました。今日の講義はとても感動しました。フーコーやバトラーが自ら苦しみながら自分たちの思考を発表したのは、本当にすごいと思います。少しでも理解してくれる人々が増えてくれると、世の中も変わっていくと思います。ある種のボーダーが取り除かれたことによる解放感、あるいは不安も書かれる。

*今回勉強した内容はとても難しい。深くて幅広い。一つ一つレジメを学ぶ度に、それまで自分の中にあった概念(ボーダー)が取り除かれているのを

感じた。それは自由になっていくという解放感と同時に大きな不安が湧き上がる。概念が取り除かれたということは自分の一つの判断基準がなくなるということ。基準がないということは、ただ漠然とした世界を前にして立つこと。そのあまりの広大さに、どうしたらいいか分からぬ不安感だけがある。もちろん今日学んで様々な見方ができるようになることは良いが、それ故に迷って仕方ない。これを解決するにはどうしたらいいのか?自分という基準で判断していくべきなのか。しかしそれすらもあやしく思えてくる。そういったことを考えさせられる授業だった。

たしかにジェンダーの理論は、足元を崩されるような不安をももたらす。しかし肝要なのは、安心感を持って立つ透明化した土台を見直すことである。

*「らしさ」ははたして本当に正解なのだろうか…と、ずっと気になりながらも生活していて、この講義できちんとしたジェンダー学を学べたことで、少し解決できたような気がしました。正直、私の周りで男女の定義というか、昔からの言い伝えみたいなものを信じている昔型の人間が多くて、私自身、辛い思いや矛盾をたくさん抱えながら成長してきたので、今は少しどれが正解だったのか混乱していますが、それは自分でこれから生きていく人生の中で見つけていけたら良いなあと思っています。

*自分がこれまで思い抱いてきた、「男らしさ」「女らしさ」それは周囲の環境や文化によってもたらされた既成概念であり、いつしか「そうあるべきだ」と思うようになっていた。気がつけば、私自身の中にある「男らしさ」「女らしさ」の概念から外れている人達に対する偏見は強くなり、知らず知らず遠ざけるようにして生きてきた。今日までの私には、それが深刻な問題であることに気付くきっかけすらなかった。今日の授業を機に、これまでの見方を否定するのではなく、見つめ直して、もう一度よく考えてみようと思った。

*そもそも「普通の人」というくくりがおかしいのかもしれない最近思う事が多くある。「アソスは普通のヤツだ」「どっちかと言うと俺は全然普通だよ」などと日常の中で使われる会話であるが、そ

そもそも「普通」の定義などどこにも無いというので俗に言う「普通」の方々は無い物をあるかのように例えて話している。少しズレたような気はするけれど、自分の考え、他人の考え、色々な角度からとらえてみようと今日の授業を通して考えました。

*今までレズビアンやゲイに偏見はあまりなかったのですが、それだけでは足りないということを知ることができて良かったと思いました。自分の価値観をこの授業を通してもう一度見直し、考えていきたいと思います。

さらに批判的な疑問も投げかけられてくる。

*男らしさ・女らしさは無意識に私たちの社会の生活にしみ込んでいるが、悪いことばかりではないと思う。否定すべき部分も多いのだろうが完全になくすのは不可能だし、もし可能だとしても混乱や新たな問題が発生し、犯罪も増えるかもしれない。また間違った視点でジェンダーを考える人は世の中にいるし社会に浸透していないのが現状だろう。教育が不足しているのが大きな問題だと思うが、先生はどう思うか。また社会はどうあるべきだと思うか。

この学生に対して、「善悪というような二項で捉える見方をしていないだろうか?」、「なぜジェンダーの束縛に疑問を呈し、そこから解放されることが犯罪の増加と結びつくのか? 冷静な分析が必要とされるのではないか?」「たしかに教育は不足している。だからこそ

この授業をしている」など、回答した。

*この授業を通して自分の視野は広がった。しかし、社会や文化の中にある“当たり前”は既に確固たるものになっており、様々な理論も存在してはいるものの、正直役に立たないのではないかと思う。具体的にどうすれば社会の中の当たり前は訂正され、大衆に受け入れられるのかを考えていくべきだと思う。「あたりまえ」を破壊する学問・理論を教師と学生が学び合っていくこと—それが大学という場でわたしたちにできることではないか。具体的にどうしていくか、簡単に答えを得られない問いを「思考」する場への導入こそ、大学の教養教育が担うべき役割であり、この授業がその場の一つであるという考え方を伝えた。

(3) ワカメ VS ジョー —メディアとジェンダー

Keywords

- ① 少年漫画 ② テレビコマーシャル
- ③ メディア・リテラシー

Target

少年漫画やテレビコマーシャルを通してのジェンダー規範・意識の刷り込みを知り、主体的にメディアと関わる姿勢を学ぶ。

Materials

- ① 少年漫画—『あしたのジョー (図資料4)』¹¹
『課長島耕作』¹²
- ② DVDテレビコマーシャル



図資料4 拡助プリント『あしたのジョー』

「サザエさん、その後」「住宅情報館」 Presentation

『あしたのジョー』において、擬音とともに展開されるのは暴力シーンの連続である。暴力は容認され、喧嘩や力の強さによって「少年」の序列化がなされる。それはスポーツとの類似性をも示す。また『課長島耕作』では、ビジネスの世界で男同士の競争に勝っていく典型的な男性像が描かれる。例外なく彼は妻子を養う。いずれもが大変人気のある漫画である。こうしたいわゆる「男の世界」に共感し、自身を重ねたり、暴力に楽しみを見出したりする男性は少なくない。

取り上げた2種類のテレビコマーシャルは、2009年夏に頻繁に放映されたものである。「サザエさん、その後」は、アニメ『サザエさん』の登場人物であるカツオ、ワカメ、タラちゃん、イクラちゃんが成人した姿を人気俳優が演じている。エレベーターガールのワカメは、法事らしき集まりでお茶出しをしている。カツオは庭でバットの素振りをしている。気配りをする「女の子らしさ」とやんちゃな「男の子らしさ」—多くの人が慣れ親しんでいるアニメは、あたりまえのようにこのジェンダー規範を映す。

もう一つの不動産業のコマーシャルに登場するのは、夫婦と子どもが男女2人という「家族」である。「駅が近くなきゃ…」と唄うのはスーツ姿の父親であり、「お庭がなければ…」と唄うのはエプロン姿の母親である。家族、父親、母親のモデル像がさりげなく示され、画面に潜む問題性は透明化する。

メディアは人々の潜在意識に働きかけ、感性を誘導し、欲望を喚起する。メディアに描かれる類型的な女性像・男性像は、現実の写しなどではなく、男らしさ・女らしさの規範を人びとの脳裏に刻み込むメッセージである。そこで求められるのは、メディアの背後にある政治的・社会的メッセージを見抜く力、とくにジェンダーでは透明化したメディアのメッセージを立ち止まって批判的に見られる力—メディア・リテラシーである。

Response

以下は、男子学生からのコメントである。

* 家族が4人で一対一の男女比が一般的とされているのか？ 家族とは一体どのようなものを呼ぶのか？ 疑問が生じた。

- * 『あしたのジョー』と『課長島耕作』を見て、力で相手に勝つか、情報で相手に勝つか、手段は違うが相手がどうなるかは同じだと思った。
- * 『あしたのジョー』は、暴力・酒・弱い者いじめ・ひきょうな手など、男がするような事がマンガでよく表れていると思った。
マンガが「男がするようなこと」を作り出すのだ。自分に近づけたコメントとして、以下があった。
 - * 『あしたのジョー』では暴力的（肉体）に、『課長島耕作』では社会的（精神）に人を蹴落としている。こういった話は、私は受けつけないが、「島耕作」は、実際にそういった雰囲気のある会社に勤めている人には共感できるものがあるのだろうと思う。(そういった会社には出来れば勤めたくはないが)
 - * 『あしたのジョー』の主人公が女性だったとしたら、きっと戦闘や暴力の場面に違和感を抱いたと思う。自然に面白い漫画だと思って読めたのは、やはり男性が主人公だったからだろうか。男性が暴力を振るうシーンに違和感を覚えないのは前回の授業で出た「やんちゃ」という言葉の影響であるように思えた。『課長島耕作』では、男性が仕事に追われている印象が強く残った。「男は仕事、女は家事」といったように、きっちり二分された設定の漫画だったように思う。大ヒットした漫画やアニメの主人公に男性が多いのは何故か？
 - * 『課長島耕作』では、「家族と仕事とどっちが大切なの？！」と島に妻によくあるセリフをいっている。こういうことを聞くのは、一般的に女性がいうものとなっているように感じるが、どうしてなんだろうと思った。
 - * 『課長島耕作』の中で男は扶養家族のために一生必死に働くんだというセリフがあったが、男は家族を養うという概念に囚われていることのあらわれであり、最後に「何だろうな男ってのは」というセリフもあるが、男はこうであるという、ただ何の根拠もなく作られたことにどうしてこんなにも囚われているのだろうと疑問に思う。人は少なからず自分の周囲の影響を受けているので、自分の周囲が「男らしさ」「女らしさ」に囚われていると自分もその影響で囚われてしまうのかというこ

とも考えてしまう。この考え方にもいろいろな考えはあるのだろうが。

そして自分の家族を見直し、マンガのなかの男の姿に父のそれを重ね、「男らしさ」を再認識する考え方もある。

*島耕作のマンガを読んだら社会に生きるサラリーマンや会社員の男の人たちは似たような悩みを皆抱えているのではないかと感じた。男が飯を食わせるのがあたりまえと言うのは昔も今も変わらない状況で何のために自分が頑張っているのかとか、じゃあなんで家族なんて作ってしまうの？と思うが、男はこんな事にも弱音を吐かずに妻と子のために一生懸命働く姿は僕はカッコイイと思うし、そうでなければいけないとなぜか思ってしまった。男は余裕があるくらいで構えていてほしいものだ。弱い女性や子供を守るという役割は理屈抜きでもそうであってほしいと思った。僕の家は母がいなくて父が僕と妹を養い続けて今まで育ててくれたし、大学にも行かせてくれた。母がいない事など、何も吐かない地の姿を見てきたからこそ、今はそう感じた部分がありました。

次の時間、彼にこう問い合わせた。「母一人で子どもを育てているたくましい女性もたくさんいます。女性＝弱いのだろうか？一体何が‘弱い’のだろうか？男だから、女だからではなく、親の愛であり、たくましさであるという見方はできないだろうか」と。

母であろうと父であろうと、働く姿を自然に見ている学生もいる。

*『課長島耕作』の中で、妻が子供と一緒に夫の帰りを待っているシーンがあったが、我が家と照らし合わせて見た場合、あまり共感できるようなところがなかった。山形県では共働きが多く、うちも例外なくそうだったので、親の帰りが遅いということはザラにあったし、それを不幸だと思ったこともない。

より深い考察もなされる。

*今日の感想一要するにメディアという媒体は世間で常識とされている「男」と「女」の認知を利用したもの。そして更にそれを利用したメディアにより常識や認知は積み重なり更新されていくが、はたしてその根源はどこにあるのか、先にその共通の認識を作ったのは世間かメディアか、それが

興味深い。

*今回いくつかのメディアを見て考えたのは、多くの人に支持されるように意図して制作されたものに疑問を持つ大切さ、さらには自分の「あたり前」にも疑問を投げかけるということである。メディアの中で暮らす私たちは受動的ではいけないと思った。

(4) 「少女」はいかに作られたか—国家とジェンダー

特別講師渡部周子氏による「歴史とジェンダー」というテーマの第一部である¹³。パワーポイントにて絵画を資料として提示した授業は、芸術系の学生にとって非常に有効であった。

Keywords

- ① 少女 ② 良妻賢母 ③ 白百合

Target

少女という存在とそのイメージの社会的構築の様相を、国家を背景にした歴史的文脈のなかに検証する。

Materials

パワーポイントを利用した絵画、少女雑誌などの資料 Presentation

第一部「少女」の形成では、「少女」の誕生を追う。有能な兵士および労働者を育成するために、その母となる女子にも一定の教育を必要とし、明治政府が「良妻賢母」教育というプランを打ち出し、そこに高等女学校という学校制度が確立する¹⁴。そして女学生の誕生が「少女」の誕生をも意味した。大人（妻）となるまでの猶予期間が生じ、「少女時代」が生まれた。「少女」への眼差しは、田山花袋「少女にいふ」『少女世界』第2巻第6号、博文館、1907（明治40）年5月「（前略）わがいとし少女子／うつくしき額を挙げよ／春は唯かくて時の間／たゆたひの間にこそ過ぎめ（後略）」に典型的に映される。〈図資料5〉は当時の女学生の絵姿である。女子修身教科書がこの「少女」に求めた規範は「愛情」規範—家族（夫を筆頭とする）への献身、「純潔」規範—性的な「純潔」を保持すること、そして「美的」規範—美しい容姿を育むことであった。

この「少女」像の流布に貢献したのは、少女雑誌である。日本で最初の少女雑誌は1902（明治35）年創刊の金港堂書籍の『少女界』である。1898（明治32）年の高等女学校令以降、女学生人口が拡大し、出版社は



図資料5 流行の海老茶袴
鎌木清方《秋宵》1903年



図資料6 少女像
『少女世界』表紙絵 竹久夢二画
1909年11月(上)、1910年10月(下)



図資料7 少女と白百合
『少女世界』表紙絵 杉浦非水画
1909年7月

女学生を読者に見込んで少女雑誌を相次いで創刊した。1906（明治39）年の高等女学校在学者は約3万人であり、女学生を中心に生み出された文化が、雑誌を通じて、大衆の間に流布したといえる。読者投稿欄は「少女幻想共同体」となっていた。〈図資料6〉は少女雑誌を飾った「少女」である。

第二部では、理想の「少女」はどのように描かれたのかを検証する。「少女」の象徴とされたのが白百合である（〈図資料7〉）。「百合に似たる少女の心」（『少女世界』第4巻第10号、増刊白ゆりの巻、1909（明治42）年7月）には、「百合の花のやうに、やさしい姿と清い美しい心とを保つて、人知れず善い行ひを励んで下さい」と書かれ、少女と白百合のイメージが重ねられた。

そもそも白百合は、西洋において聖母マリアの持物（アトリビュート）として描かれる花である。天使が手に携える白百合の花は、聖母マリアの純潔を意味している。また西洋絵画において、白百合はマリアだけではなく、若い女性の純潔の象徴としても用いられている（〈図資料8〉）。

明治期に西洋から白百合を純潔とする象徴性がもたらされる。たとえば、前期浪漫主義と位置づけられる『文学界』に集うキリスト教徒の青年達によって、この象徴が用いられている。浪漫主義芸術において、白百

合は純潔だけではなく女性への思慕の念とさらには「芸術」の象徴を意味した。これはダンテを芸術の世界へと導く女性、ペアトリー・チェが白百合を携えて描かることから、男性を芸術創造へと導く女性（と彼女への思慕の念）を意味し、さらには芸術の象徴として白百合を用いるようになったと考えられる。前期浪漫主義『文學界』で形成されたこの象徴性は、後期浪漫主義『明星』に引き継がれた。

少女雑誌の表紙絵、投稿欄のペンネームとして白百合は用いられた他、全国の女学校のエンブレムとして流布していく。当初はミッション系女学校で用いられていたが、やがて公立学校等の非宗教系の学校にも採用される（〈図資料9〉）。その際、浪漫主義芸術において意味した愛という要素は剥奪され、純潔という意味のみを担うことになる。

ここに検証されたのは、少女理念が歴史的に形成されたものであるという事実である。そしてこの分析を可能したものこそジェンダーという概念である。

Response

*普段何気なく使っている“少女”という言葉にこんなに深い意味があるなんて驚きました。戦前の国家政策としての少女像が今現在にも、その効力は少なくなったにせよ続いているというのは不思



図資料8
チャールズ・オルストン・コリンズ《尼僧の想い》



図資料9 和歌山県立橋本高等女学校

議な感じがします。教科書に“女は美しくあれ”なんて載っているのは妙な物ですが、実際自分も着飾りたいという意志を持っているという点ではこの女性の道徳のようなものが自分の中にはしみついているのかもしれませんと感じました。

*「少女」という言葉をここまで深く考えたことはなかったので、すごくいい機会になったと思った。近代の理想の少女像は確かに現代においても大事というか、少しは求められるものだが、それが國家の規定になるというのが、「すごい国だな日本」という感想をもってしまった。近代の少女小説を読んでみたくなりました。

*少女とは男性優位社会の時代背景と共同幻想から生み出されたものであるという印象が残った。では今後の少女はどこに行くのだろう。

*自分の周りに存在する名称の社会での位置づけがどのように行われたものかを知るのはとてもおもしろいと普段から感じている。白百合が西洋社会において純潔を表すアトリビュートである事は知っていたが、それが日本文化に入ってきた経緯にも興味をもった。

「少女」という存在を社会的・歴史的に捉えなおすことは、学生に新鮮な驚きを与えていたといえよう。まさにこれもジェンダーという視点がもたらす、一つの

知の攪乱である。

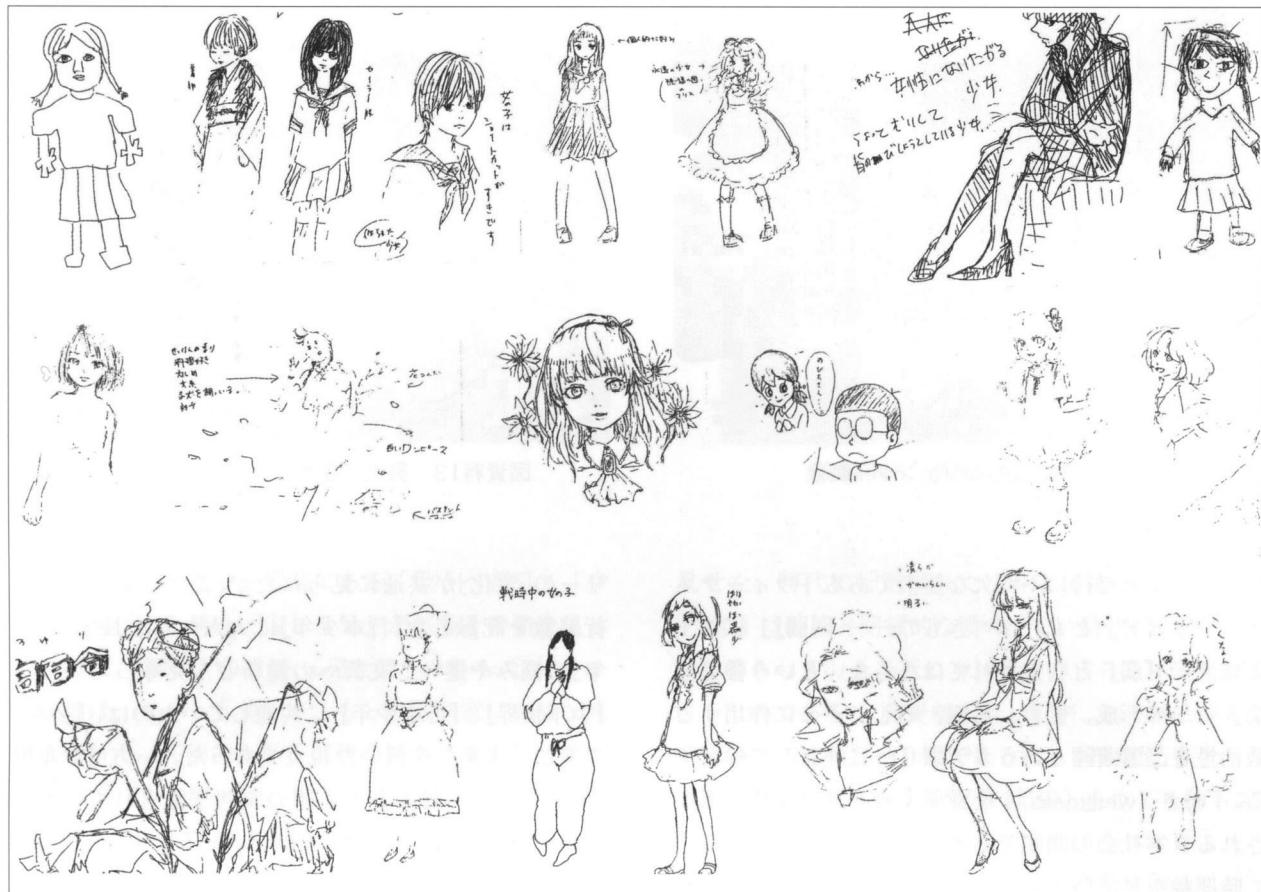
そして自分の分野へと興味を発展的に結びつけていく。芸術系大学でこそ見られるものである。

*明治の美人画に興味があるので、今後作品を鑑賞するに当たって今日の知識を生かしたいと思います。女性自らがジェンダーに飛び込んで行っている気がします。そうしないと女性としてまとう生き方ができないかもしれません。

*とても面白かったです。今まで何となく明治・大正あたりの女学生などの文化が好きで、描くのも好きだったのですが、それがどのように生まれ、どのようにつくられていったのかとても興味深かったです。以前『花物語』を本屋でみかけたので、買いたいと思いました。

*私は嶽本野ばらも竹久夢二も興味があり、少女を描く作家としては他にも林静一や中村裕介など好きで、少女像にひかれるものがありました。今回の講義で得たものはたくさんありましたので、講義の中で紹介された本を読んでみたいと思いました。

*私はイラストレーションを描くときのテーマが大抵「少女」なので、今回の授業はとても興味を持って聞くことができました。これからも「少女」を描こうと思うのですが、何も考えずに描くだけでなく、「作られた概念」だということをもっと詳し



図資料10 芸工大生が描いた「少女像」

く調べたうえで、いろいろ考えながら描くように
したいと思いました。

〈図資料10〉は、芸工大生が描いた「少女像」である。たくさんの個性が溢れる。講義の翌時間に全員に配布した。次年度2010年には、〈図資料11〉のようなイラストも現れた。自らの性との格闘である。こうした学生の「声にならない叫び」を誰がどのように聞くのか。黙殺してはならない。彼(学籍上は女性)は、こうした授業の存在への感謝を最後の感想で述べてくれている。

(5) 「少年」はいかに作られたか—戦争とジェンダー

Keywords

- ① 「男らしさ」、「男性性」 ② 少年 ③ 戦争
- ④ 人種

Target

拙著『大日本帝国の「少年」と「男性性』を基に、「男らしさ」を国家・政治・戦争と結びつけて考える。¹⁵

Materials



図資料11 性への疑問

少年少女雑誌の表紙・挿し絵などのパワーポイントによる提示

Presentation

歴史的文脈のなかで「男らしさ」を脱構築し、さら



図資料12 明治期の典型的なジェンダー表象



図資料13 男女の差がない朝鮮の少年少女

にその構築と維持に不可欠な要素である「ウイークネス・フォビア」とも呼ぶべきもの——「『弱』」に対する嫌悪と『弱』と判定されてはならないという強迫観念——の形成、変容、再編、そしてそこに作用する政治性を、「少年」というカテゴリーに注目して検証する。「弱さ（weakness）」を嫌悪する心性や文化が形成される日本社会の問題である。

時間軸を日清戦争から第二次世界大戦までに、検証の場を「少年の世界」に置く。第1部では当該の時代の代表的な少女・少年雑誌を史料とした表象分析を行い、第2部では陸軍幼年学校、満蒙開拓青少年義勇軍、海軍特別年少兵などの「実体」の「実態」に視線を投じた。

明治期雑誌『少年世界』からは、「ウイークネス・フォビアの形成」プロセスが可視化する¹⁶。「少年」だけに「日本男子」としての義務と期待が語りかけられ、一方で「少女」には「やさしさ」、「看取り」などの性質や役割が意図的に配分され、ジェンダーの境界線は言説によって色濃く引き直される（図資料12）。また日清、日露という対外戦争、朝鮮植民地化の時流にあって、朝鮮人を「弱く、男女の境界があいまい」（図資料13）、中国人を「弱虫」と評し、「比類ない強さ」を有した「日本男子」というカテゴリーとの差別化を図っていました。それらは当時の帝国主義觀、脱アジア意識を反映するものであるが、同時に日本という近代国家が抱いていたウイークネス・フォビアを「少年」に刷り込むものでもあった。

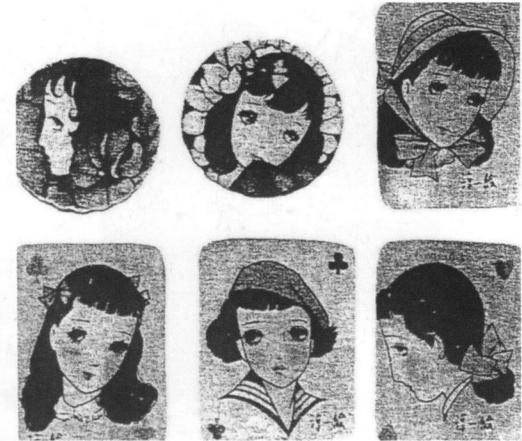
軍縮へと向かう時期、少年雑誌には「少年」カテゴ

リーの「童化」が共通に見られたが、この時期最大の発行部数を記録した『日本少年』は大人へと成長する「少年」の悩みや迷い、文芸への愛なども見守っていた¹⁷。『少年世界』、『日本少年』に共通していたのは、「少年」の前に「未来」を置いた視点であった。一方『少年俱楽部』では、「日々」の道徳の実践が論されていた¹⁸。いずれの雑誌においても、「少年」と「少女」のジェンダー規範は区別されてはいたが、「男らしさ」やウイークネス・フォビアの強調といったものは見られなかつた（図資料14）。また少女雑誌に少女像を創り上げていた男性作家の心理をジェンダーの視点から分析し、二つの仮説を提示した。一つは意図的なジェンダー配分のなかで対極のジェンダーへの憧憬と自らのジェンダーにおける充たされない欲求を少女像のなかで実現した「ジェンダー・トランプ」という解釈の可能性、さらに「弱さ」を自認し始めた「少年・男性」が「少女・女性」をより弱く儂い存在というイメージに送り込むことでジェンダーの境界線を維持した「ジェンダー・スライド」という解釈の可能性である（図資料15）。いずれもジェンダー規範からの逸脱の困難性、ウイークネス・フォビアの表出と考えられるものである。

1930年代以降に中心的な史料『少年俱楽部』は、「男らしさ」、ウイークネス・フォビアの再編を見せた。「男らしさ」は道徳や正義という根拠不在の価値付けがなされ、再定義された。道徳のなかでもとくに勇気を象徴した「創られた勇士」は具体的なイメージを提供し、軍人の「男らしさ」を霸權的な地位に復権させるものであった。やがて「男らしさ」のメッセージの使



図資料14 夢二の描いた少年



図資料15 男性作家が描く少女

者は身近な兄となり、戦地にある「敬うべき兄」、「少年」を夭折へと誘う「逞しき兄」が毎号その姿を見せていった。「戦い」の時に、「兄と弟」のホモ・ソーシャルな絆は、もっとも美しく、もっとも国家に有益な連帯となった。圧倒的な発行部数を持つ大衆メディアに成長した『少年俱楽部』は、その連帯に入ることを、「少年」にとっての憧憬に仕立てたのである（〈図資料16〉、〈図資料17〉）。

「兄弟」という意識はアジアの国家にも適用され、中国人を「豚」と表象し、朝鮮人は「ジェンダーの境界が曖昧な民族」と評した日清・日露戦争時とは異なり、アジアを家族と見なし、長兄的な存在として日本国民を位置づけ、朝鮮人は日本国籍を持つ逞しい次兄的存在となり、南方のビルマは末弟とされた。それは近代天皇制が語り続けていた家父長的なイデオロギーを映し出すものであった。

第2部では、満州事変以降、時代のエリートが集う学校へと変貌した幼年学校というホモ・ソーシャルな相互監視空間は、「男らしさ」の注入・構築、ウィークネス・フォビアの実態を晒した。「少年」による自主的、積極的な内面化には、大人たちが創出した「少年」の建前論によって「少年」の正義感が巧みに利用されたことを示すものであった。一方で、その空間はウィークネス・フォビアの包囲網のなかにあり、「男らしさ」からの逸脱は「少年」にとって最大の脅威となり、緊張の糸に絡められ、「少年」文化特有の暴力と虚勢を生み出していた。同時にその空間は、教師が見せた擬似家族愛、「逞しき兄のような先輩」との同性愛の存在をも

見せた。時代の「選ばれた少年」であろうと集った「少年」は特権と閉鎖的な愛の上で、時代・国家が求めた「男らしさ」を必死に身に付け、自らを差異化していったのである（〈図資料18〉）。だが、その先に待ち受けていたのは死という闇であった。満蒙開拓青少年義勇軍、海軍特別年少兵（〈図資料19〉）もウィークネス・フォビアの現実的浸透を映していた。

対外戦争を経ながら、「弱小国家」から帝国化へのプロセスを歩んでいった日本の歴史は、「男らしさ」の歴史的・可変的現象としての実像、その構築性、政治性を「少年」というジェンダーカテゴリーに見せた。その歴史は「男らしさ」を構築したウィークネス・フォビアが、「男性性」の根幹にあることを暴くものであった。さらにそれは「男らしさ」の幻想とともに、大衆的イデオロギーとして国家や権力の有効な策略となるものであることをも示した。「男らしさ」が批判的対象とはならず、ただ肯定的に描かれている限り、この策略の危険性は温存される。そして戦後においても幻想とフォビアの再生産を許しているのである。自然視され看過されてしまうものを疑うこと——それは一つのドラスティックな発想の転換を求めるものである。「ジェンダー」という灯りを手に歴史の扉を開けることにより、また違った「見方」を発見する可能性が生まれるであろう。そこから「男性性」が有す「日常」と「政治」における問題提起が可能になる。

Response

*今まであまり知らなかったけれど、「男らしさ」の陰には国家の策略があつていじめや死などおそろ



図資料16 兄弟



図資料17 兄の肉体



図資料18 幼年学校生



図資料19 海軍特別年少兵

しいこともあってほんとうにこわいなと思った。他人に「男らしさ」にとらわれてほしくないし、自分ではそれにとらわれたくないなと思う。陰に潜んでいたものはほんとうにおそろしいことだったのを知って驚いた。

* メディアが国家からの統制により簡単にその少年像をコントロールし、人々のイメージの中に植えつけるのは今の時代だととても恐ろしいことに思えた。

* 男らしいというとプラスなイメージであったが、国やメディアからの強制的に作られたイメージで、その人物像に合うように努力をさせられていたんだと知った。男らしい・女らしいと聞くと人はすぐ要素を想像することができる。現代もそういった作られたイメージを当たり前だと思っている

ということは、国やメディアなどに操られているということだと感じることができた。言葉に騙されず、真実を見極める力をつけたいと思った。

* 今日の話を聞いて、「少年」「少女」が「作られた」というのではなく、「国民」「市民」は、國のための「駒」「お人形」にされていったのだと感じた。「少年」は実働のための、「少女」は実働を支えるための。現代は落ち着いているほうなのだろうが、昔の「当たり前」がいまだに残っている。もしも再度「作られていた」時代が訪れた際、違和感を覚えながらも受け入れてしまうのかもしれない。それだけ人は「大衆の力」、自分が普段軽く見ている所からの力には弱いと思う。

* 「少女」と同じく、「少年」というカテゴリーにも様々な抑圧がかかっていることが分かった。とく

に私は「少年」の場合、国家や家からの期待の重さが「少女」の時と違い、とても強かったように感じた。そこから生じる「男らしさ」とよばれる、総称すると“強さ”なるものが「少年」たちに悲劇をもたらしてしまった。こういった「少年・少女」のイメージはすごく自己批判につながると感じた。これだけ国、家、周囲の人からこうだと！という規範を押しつけられたら、それにどうしたって近づけない人（身体についてなどは特に）は、自分のことを認められずに責めてしまったに違いない。まさにweakness-phobiaを作り出してしまう観念であると思う。その弱点といわれていたものが良い所かもしれないのに。

*今までよく問題になり耳にしてきたのは女性への抑圧についてばかりで、つらい思いをしてきたのは女性なんだと思ってしまっていて、それに後悔しました。国により求められた「少年」を生産するために雑誌というメディアが使われ、そのイメージがすり込まれて「少年像」というものができたという流れが分かりました。男の子はたくましい、強い、勇ましいというプラスイメージがあるという反面で、たくましくなければならぬ、強くなければならない、勇ましくなければならない、そうでないヤツは男じゃない、という強いプレッシャーがかけられていることがかわいそうに思いました。国につられて少年兵となって死んでいった男の子が沢山でてしまったことは、本当に氣の毒で、まさに悲劇など思いました。

*男だろうが、女だろうが結局、国やメディアというものにおどらされているのがとてもおそろしく感じた。戦後50年以上たった今でも、まちがいなく「男らしさ」「女らしさ」そして「こうあるべきだ」という強迫観念はたしかにあり、戦争がどうのこうのという前にそれに対して何もうたがいをもたない自らにもゴロリと石を落とされた気分になった。最近「草食男子」「肉食女子」「弁当男子」などという言葉がたくさん出回っていますが、先生はどう思いますか？私は正直何故そこまでカテゴリー分けにやっきになるのか理解できません。

「ゴロリと石を落とされた」、これがこの授業におけるPresentationの狙いである。そして最後のレスポンス

のように、学生は問いかけてくる。そしてそれを考え、答える。いつしか筆者は学生のレスポンスに導かれていく。

(6) エリスと智恵子—文学・芸術とジェンダー

Keywords

- ① 女流文学・男流文学
- ② 鷗外『舞姫』
- ③ 作家智恵子

Target

文学のなかに潜むジェンダーバイアス、さらに芸術家智恵子に見るジェンダーの悲劇を考える。

Materials

- ① 高村光太郎『智恵子抄』抜粋
- ② 森鷗外『舞姫』抜粋
- ③ DVD画ニメ『舞姫』¹⁹

Presentation

女流文学・男流文学という区分、前者が「少女時代の全能感をすたずたにされたのち、大人社会のスタンダードである男性型思考回路の習得を拒否した女たちの自らの性と人生への贊歌あるいは挽歌」、後者が「男の妄想の産物」であるといった評価がある²⁰。

鷗外『舞姫』を再評価する。「格調高いロマン文学」と評される作品の冒頭を読む。そして画ニメ（30分）を見せる。画ニメは、エリスをか弱く、愛らしく、薄幸に描く。しかし、ナレーションはあくまでも豊太郎の苦悩だけを語っていく。それは男の妄想の産物であろうか。

次に、高村智恵子に焦点を当てる。1886年福島二本松に生まれ、日本女子大学校家政科に入学後洋画に興味を持ち、女子思想運動にも参加した。やがて新進気鋭の画家となった智恵子だが、高村光太郎が彫刻に専念する一方で、自らは家事などのために自分の芸術活動を制限される。やがてその葛藤は智恵子の精神を乱す。「光太郎と智恵子の純愛」というバールを剥ぐとき、ジェンダーの悲劇は浮かび上がる。アーティストとして表現の自由を奪われた女性の苦悩は、芸工大生に確実に迫る。打ち消された智恵子の声を歴史のなかに聞かなければならない。

Response

*ジェンダーとか、そうした視点から考えず、まずはじめに感じた舞姫の率直な感想は、「エリスがかわいそうだ」です。しかし、その一方で、その言

葉の表現の美しさや、雰囲気からその世界に酔いしれてしまった事も事実でして、「ロマン文学」と呼ばれている事にも正直うなづけました。なんだか難しくてジェンダーとからませての考えは浮かばなかったのですが、とにかく舞姫を見て、女性がどのように感じたのかが気になりました。リスポンスが楽しみです。

レponsからコミュニケーションが生まれる。

*高校までの授業では文学の中身だけしか学びませんでしたが、今日の講義で裏側にあるジェンダーを知りました。恥ずかしいことに、今日紹介された文学作品はどれも読んだことがないので、内容はよくわかつていませんが、前回までやった男と女の差別化がこんな所にまで反映していたことがショックでした。特に昔の女性はどこにでも壁が作られ、鉄の囲いの中で生きていたという話が出ていた智恵子さんの生き様を見て、莫大な可能性を秘めていた多くの女性たちの価値をつぶす社会が過去に存在していたことを忘れず、もっと自分でジェンダーについての知識を増やして、ずっと考えていきたいなあと感じた講義でした。

「莫大な可能性を秘めていた多くの女性たちの価値」が潰されてきた史実を、学生に伝えていかなければならぬ。

*現代を生きる私にとっては“人間が自分の思うままに生きられない”という事が上手く信じられません。だから智恵子は夫にも家事をやらせて絵を描けばいいし、鷗外はエリスを日本に連れて帰ればよかったです。しかし、別の見方、そういう時代であったのだと考えてみると、それはとても窮屈で生きづらい世の中であったのだろうと思います。きっと私も智恵子のように頭がおかしくなってしまうでしょう。智恵子や鷗外の生きた時代に比べれば、現代とはかなりジェンダーを含めその他多くの事柄において生きやすい時代に見えます。しかし、それらはあくまで表面的な事であると言えるのではないでしょうか。私たちの無意識なマイノリティ排除は存在し続けています。いつの時代にも社会全体の大きな流れから排除されて忘れ去られてしまう人々がいます。こういった人たちが、何に苦しみ、どうして排除されたのかを知る事こそ、私たち人

間が本当に自分自身の意思のままに生きる事の出来る時代を作り出す鍵なのではないか、と今日の講義を受けて感じました。

鷗外のジェンダーバイアスをそのまま受け止め、豊太郎に「男性の苦悩」を見る男子学生もいる。

*舞姫のアニメを見て、主人公の豊太郎の非常に激しい苦悩を感じることができた。愛する恋人を妊娠させてしまったが、自らの仕事と名声を保つためには、帰国せざるを得ないという、究極的な選択に迫られた豊太郎の気持ちを考えると胸が痛くなつた。もし自分が同じような境遇に立つと考えると、とても恐ろしいが、もしかしたら豊太郎と同じ行動に出るのかもしれない。とくに男性にとっては、名声や仕事への思い入れが深いのかもしれないと感じた。

豊太郎とエリスにジェンダーの不平等を見出し、鷗外の女性蔑視を根底に置く「男性視線」を見抜く。

*智恵子がもし夫が制作に専念しているのに自分でできないという理由で精神を患つたのなら、エリス同様、女性はなぜいつも被害者なのだろうか。舞姫では豊太郎の生い立ちは苦悩、考えはたくさん表わされているのに、エリスの胸の内を描こうとはしないのか。豊太郎の決断により、エリスの精神や体がボロボロになったのは明らかで、原作を読んでも、DVDを見ても、誰もが豊太郎のせいだと分かる。しかし、なぜそれを言葉にしようとしているのか。最後には友人に對しての憎しみまでも述べているのに、自分自身の罪に大きくふれようとしないのだろうか。光太郎も豊太郎も女性を深く愛していたのは本当だと思う。しかし、傷つけてしまった原因に對して、真正面からなぜ立ち向かおうとしないのだろうか。きっと舞姫と同じようなストーリーを女性が書いていれば、豊太郎のことをひどくののしり、また、そんな男性を愛してしまった女性のことをも責めるだろう。男流文学が妄想の產物で、女性文学が男性思考を拒否した物だということがはっきりと分かった。

*私は高校生の時に初めて『舞姫』を読んだのですが、その時に、すごく文学として有名な作品で文章の美しさもすばらしかったのですが、内容的にはあれ…？と思った覚えがあります。今回改めて

画ニメを観てみて、やはり、日本語の美しさなどはとても伝わってきました。しかし、ジェンダーという観点からみると、この話は男流文学（妄想の産物）そのものであると思います。この話はあくまで全て豊太郎（男性）の視点であり、エリスも結局、男性から見た女性像にすぎない気がします。やはりここでも女性のイメージは「美しく、学問とはあまり縁のない、男性にひたむきについていく」といった印象を受けました。話の中でどこまでも豊太郎とエリスは対等ではなかった。年齢差はあるけれど、もう少し2人が対等であったならこんな結末には絶対ならなかつたと思います。豊太郎をも社会の弱者とする見方も登場する。

* 豊太郎とエリスは社会的弱者同士である。男性である豊太郎も、男中心社会の被害者。男中心社会にあるヒエラルキーの上層に属する男たち。そして虐げられるのは女ばかりではなく、若いある種類の男たちも、社会的表層にこそ出てはこないが苦悩する。社会をそういうものとして受け入れられる者と、受け入れきれない者。男中心社会に適応できる（つまり男中心社会をつくった男たちとほぼ同種）男はズタズタにされる機会もないわけだから、物の見方がゆさぶられることも少ない。Aという定義しか知らぬまま生き続ける（何と迷惑なことか）。豊太郎とは、本来Bという本質を秘めていた。しかし生きていく中で、Aをすりこまれ続けた。本来の性質であるBを認めさせてもらえず、Aに縛られ続けたという意味で、彼は男中心社会の被害者といえる。なぜある種の男たちのAばかりがまかりとおるのか。なぜ豊太郎はエリスと子どもよりも名誉をとらざるをえなかつたのか。己というただの個の幸福についてつきつめて考えたなら、彼は何をとつたのか。つきつめて考えられるような社会のベース（様々な可能性が認められるおおらかな社会）が必要である。

こうしたレスポンスを読み上げながら、他の受講生が何を考えているのか、どのような感想を持ったのかを共有する。

(7) 事実を、痛みを……—性暴力・日本軍性奴隸制

Keywords

- ① 性暴力 ② 性奴隸 ③ 性犯罪 ④ DV
- ⑤ PTSD

Target

旧日本軍による中国における性奴隸制の存在を知る。さらに現代の性暴力・犯罪の実態を直視し、被害者の心情を聞く。

Materials

- ① 『「慰安婦」・戦時暴力の実態Ⅱ』
西野瑠美子編 3章²¹
- ② 『金子さんの戦争—中国戦線の現実』
熊谷伸一郎著²²
- ③ 『元兵士の戦場の性～証言と沈黙、そしてPTSD』²³
- ④ 朝日新聞記事「65年目の遺言」
「ひと 中国女性の戦争の傷跡をたどる」
- ⑤ 『性犯罪被害にあうということ』 小林美佳著²⁴

Presentation

従軍慰安婦という欺瞞的な用語を拒絶して、性奴隸制という犯罪の実態により見合った名称を導入する。元日本軍兵士金子安次氏の講演（図資料20）を実際に聞いた筆者が、その証言を再現する。

「（強姦した後に）1, 2の3で、女人を井戸に突き落としました。そのあと4歳くらいの子どもが泣きながら「ママア、ママア」っていいながら井戸の周りをぐるぐる廻っていたかと思うと、箱を持ってきてその上に乗って井戸の中に自分から飛び込んでいっちゃたんです。上官が「金子、かわいそうだから手榴弾を投げ込んでやれ」と。

さらに最近の新聞記事や文献のなかに、その事実を確認する。それは女性の人権を破壊する性犯罪であった。現在、謝罪と賠償を求める活動は広がっている。2005年アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」WAMは、「慰安婦」問題に特化した「慰安婦」問題の記憶の拠点として出発した。女性への暴力根絶・非暴力・非差別・男女平等・平和な社会の実現を願う人々による活動を行う機関である。また映画監督として、南京事件を追う同世代の若者がいる（図資料21）。そこには過酷な現実から目を背けるのではなく、事実と正面から向き合い、自分にできることを模索する姿がある。

性暴力・性犯罪は過去のものではない。つい最近起



図資料20 真実の迫力



日中戦争の際に、日本軍が多くの捕虜や市民を殺害した南京事件。その現場にいた元兵士の方が加害者を告白した藍原伸「南京引き裂かれた記憶」を監督した。大阪などに続いた大阪の市民ブループに依頼され、10年余り元兵士の証言を集め、11月から東京で開催する。制作を引き受けた京都大学学生会に引き受けた。京都大学学生会に公開された作品を作り上げた。

「ゆきゆきく、神軍」で知られる原

一男監督と出会い、ドキュメンタリービデオをして8年。結婚式の撮影など食いつなぎ、初めて本格的に劇場

揚子江河畔での大量殺害、食料

略奪、強姦、「死ぬか生きるかわかった」。最低の動物みたいになってしまった。レンズに頬を実名をさらして語られる「罪」の記憶は重い。

脇義典「死ぬか生きるかわかった」。自身も書物の実

験を知らなかった。「虞殺うつむくさうよね」。制作中、友人に疑問

を投げ掛けられたこともある。「歴

史を知らず、中国に反対して否定論

をうのみにしてしまって、そんな世

代に届けたい」。南京に出向いて、

被虐者の証言も集めた。糾弾闘に陥

らず、双方の証言を覗々と並べた。

亡くなった祖母も、中国に出席し

た元兵士だった。酔っぱらっては、

「中国人の『女』が殺しに来る」と曰

本力を手に暴撃した。今になって、祖

父が胸に抱えていた闇が理解できた

気がする。

「日本と中国、祖父の世代と僕ら

の世代。二つに引き裂かれた記憶の

辯を埋める作品です」

図資料21 若き監督と日本軍

こった電車内での女性乗務員に対するレイプ、ストーカー事件などは周知のように後を絶たない。小林美佳『性犯罪被害にあうということ』は、レイプ被害に遭遇した女性の勇気ある証言である。その告白にしっかりと耳を傾けなければならない。さらに性犯罪では被害者を責める視線が存在したり、DV (Domestic Violence) やストーカー事件がプライベートな領域として看過されたり、暴力が常態化されたりするといった問題がある。

そして、これらの性暴力・性犯罪のもっとも憂うべき後遺症がPTSD (Post-Traumatic Stress Disorder) 心的外傷後ストレス障害である。現実のなかに、PTSD の姿を見なければならぬ。

Response

学生の眼差しは真剣そのものであった。証言は間接的であったが、事実を話すところに力は宿る。最初に男子学生の感想からいくつかを抜粋する。

*衝撃的な授業内容だった。何かうまい言葉が見つからないが、心から暗くなるような気がした。私は女性が大好きである。魅力的で纖細で、男性には無いものを持ち合わせているからである。正直、この授業を履修したきっかけも、授業内容にどことなく卑猥な要素を感じていたというのが本音だ。今になって思えば、とんでもない話である。女性を大切に思うからこそ、今日のような授業で

のお話をしっかりと理解し重く受け止め、私がこのカードを記入している今、この瞬間も苦しんでいる方々がいることを決して忘れてはならないと思った。

*何気ない時、普段レイプなどという言葉を聞いても、正直自分は「ああ、レイプか…」などとそつ気ない感じで流している気がする。すごく被害者の人たちはかかえられない傷を負っているはずなのに、日本では当たり前のようにレイプ・強姦などという冗談すら飛び交うこともよくある話だ。今回この授業を通して改めてそういうことをする人の恐ろしさや、欲のために人を殺すとか、わかつてはいたつもりだけれど目を覚ましたような気がした。AV一つでもものはやジャンルに「レイプ」などというものがあること自体おかしい事だし、いつまでたっても過去の過ちを反省できない日本自身にも、普段からのうのうと過ごしている自分自身にもどうしようもない気持ちを覚えてしまった。そして改めて金で人を買うとか、売るとかの金の恐ろしさというのも身にしました。

*昔、マネーの虎という番組がありました。起業しようとする人々に出資する社長たちが登場するのですが、その中にアダルトビデオ関連の社長がいました。幼いながらもそのときに自分は何も犠牲にせず、苦を女性にだけ強いて利益を得ている最

低な奴と思ったことを思い出しました。たしかに人間の欲は尽きることはないはずなのでその市場を狙うのは当然といえば当然に感じますが、そのやり口は納得のいくものではありません。女性を食い物にする社会の体系はいまいち変化に乏しく、どう改善されるべきか予想もできませんが、ネットや雑誌など、メディアを介した性情報の氾濫で、若年のそういった意識が希薄になっているのではないかと感じています。同じ男性として申し訳なく思った人も講義を受けた人々の中にいたのはないでしょうか。

ここに見えてくるのは、こうした性犯罪の問題をはじめて投げかけられた戸惑いである。性犯罪者の声は「男性」に届いていない。男子学生への性に関わる教育は、いったいどこでなされているのであろうか。被害者である女性の傷みを知らない男子学生による性犯罪の危険性が身近に潜伏していることは、大学のサークルなどでも後を絶たないレイプ犯罪が証明している。

性奴隸制という歴史的事実に関する感想もさまざまである。全く耳にしたことのない学生もいれば、「重い」話題として避けたがる学生も多い。「重い」ことに目を向けさせること、考えさせること、これも教養教育が担うべきものであろう。

*歴史に関連することに関しては初めて聞く内容ばかりで、本当にこんなことがあったのかと驚くとともに、知らないというのもおかしいと感じました。日本政府も教科書に載せるなどして事実として残すべきだと思います。結局自国が不利になることはあいまいに対応しているように思えてなりません。事実を知ることが誤解や偏見を緩和する一番の方法ではないかと、この講義を受けるなかで感じています。

性奴隸制に関しては、高校での教育によって大きな違いがある。

*私は高校生の時に実際に韓国でハルモニの家（性奴隸として扱われた女性たちがいる）に行き、生の声を聞きました。一人のおばあさんが実体験を話してくれたのですが、その声には悲しみ・怒りが含まれているのを、言葉がわからない私たちでも感じました。その頃の兵が80歳のおじいさんなら、ハルモニたちももうおばあさんで、日本政府

に何も要求が受け入れられないまま、もし被害にあっていました全員が亡くなってしまったら、日本でこの問題は闇に消されてしまうのではないかと思います。事実を消そうとする人達の思いが理解できません。今日の授業を受け、改めて“性”に対して軽い気持ちで関わってはいけないと感じました。さらに、女子学生からはこんなレスポンスが届く。
*被害者にはまったく非がない。完璧が求められているのではないか。被害者なのに小さくなつて生きていかなければならない。「レイプするくらい元気があって欲しい」という政治家の発言は「やるせない」。

女子学生からの核心をつく言葉が続く。「売買の対象は女性であるという事実」、「法的整備が整わない男中心社会」、「困ったときは女性を使い、自分たちは安全圏にとどまっているんじゃない」、「過去の問題が解決していないのに、未来の問題について考えるのは、とてもむずかしい」。

そしてこうしたテーマには、筆者の予想を超えた反応が返ってきた。他者の辛い思いに耳を傾けるなかで、自分の声も聞いてもらいたいと思う。この授業はそんな場でいい。友人そして自分自身の問題が語られる。「友人の自殺」、「DVの被害者である友人」、「いじめを受けた経験」などである。さらに「女性から認知されない」という悩みもぶつけられる。「かっこいい」とは言われない男子、女子にまったく相手にされない男子一異性に相手にされないということは、男女ともにその深刻さは大きい。しかし、そうした悩みを打ち明ける相手を見つけることは容易ではない。女子の場合には同性の友達同士の輪が男子に比べて助けになるようだが、男子の場合にはそれも難しく、問題をより一層深刻にする。率直にぶつけられたことばのなかに、心の内の残虐さを垣間見る。その延長線上に、昨今の無差別な少年犯罪が見えてくる。

テーマとは直接結びつかないが、自分や自分の周囲の深刻な問題を投げかけられる。それは授業はじめのレスポンスを、授業の重要な核としていく。学生からの以前より熱い問い合わせに応えなければならない。ジェンダー学の重要性・意義を再認識する。

他者理解の本質を見る感想を最後に挙げたい。

*今回聞いたお話をどれも、性別云々の問題の前に、

人間を自分と同じ人間として平等にみることのできないという、この一見個人が認められている社会に出来てしまった、落とし穴だと思います。文明・科学が一定の水準まで上がった中で、今後私たち人間が目を向け取り組まなくてはいけない問題は人間同士、他者との関係であるのだと改めて感じた講義でした。

そして授業時間を超えて連続したコミュニケーションが生まれていく。

*授業最初のレスポンスで、男の人の感想を聞けたことが嬉しかった。異性で「性」に対する問題を話し合う機会はほとんどないので、そういうことについてどう感じているのかすごく気になっていたからです。読ませてもらった4人の男性はみなさん講義を聞いてたくさん考えて下さって、女性の苦しみを分かろうとしていたので、安心したというか、ちゃんと考えようしてくれている男性もいるのだなあという驚きがありました。

そこに、レスポンスがまた一つコミュニケーションを生み出していく。

(8) ヘイトクライム—性的マイノリティの人権

Keywords

- ① 同性愛/異性愛 ② 性的マイノリティ
- ③ セクシュアリティ ④ トランスジェンダー
- ⑤ ホモフォビア ⑥ ヘイトクライム

Target

感情的にではなく論理的に同性愛を捉え、さらに性的マイノリティへの差別・抑圧・偏見について考える。

Materials

- ① はるな愛の自叙伝『素晴らしき、この人生』²⁵
- ② 映画 *A Voice of Hedwig* の一部²⁶
- ③ 「あるヘイトクライム事件と報道」²⁷

Presentation

多くの学生が「ホモ・レズ」といった言葉を知っている。しかし、そのイメージは「何かキモいもの」「テレビのお笑い」であり、「自分には関係ない」「私は差別しない…」といったスタンスである。実際には、その他にも性的マイノリティが存在する。またたとえば同性愛者に対してなぜ偏見があるのか、その偏見はいかに生じたのか。そして不可視にされた差別や抑圧は、

「異常」というレッテルによって封印され、問題視を免れてしまう。さらに、自らの問題として抱え込んでいる学生も存在し、その数は予想以上に多い。

2000年東京の夢の島で起きた殺人事件は、同性愛者の人権そして命が軽んじられていることを示す。そこは同性愛者の溜まり場であり、そこに居合わせた30代の男性が数人の少年に殴り殺された。少年たちは同性愛者を狙った犯罪を繰り返していた。「ホモは警察には行けねえ」からである。動機は「キモい」からである。根拠のない憎しみが少年たちを同性愛者に対する暴力に向かわせる。一人の命が奪われているにもかかわらず、メディアにも根底にある「ヘイト」を問題視しようとする動きなど、ほとんど見られなかった。あきらかに彼の命は異性愛者のそれと比べて軽視されている。

テレビで明るい笑顔を振りまいているニューハーフと呼ばれるタレントはるな愛の過去は、やはり苦悩の表情を浮かべる。半生を綴った著書のなかで、親や教師の「男の子だから」ということばに違和感を覚えた時、激しいイジメに遭っていたとき、自殺を考えたとき、そしてゲイバーという自分の居場所を見つけて前向きに生きるようになったときを振り返る。

A Voice of Hedwig でオノ・ヨーコは、彼女の「他者理解」のスタンスを見せている。さりげなく自分にできる援助をする。LGBTQ（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クイア）の生徒たちの語りは、暴力に晒された「生きづらさ」を生々しく見せつけていく。学生の多くにとって、同性愛者はテレビに映る「オネエ」キャラと言われるタレントでしかない。明るく、「性別二分から外れた者」として周囲から笑いのネタにされる人たちだ。彼らは同性愛者の存在を知らしめながらも、本質的な問題や苦悩を隠蔽する。ハーヴェイ・ミルク・ハイ・スクールの生徒たちは、笑いの背後の闇を見せる²⁸。

そもそも同性愛者に対する差別や迫害が強まった背後には、キリスト教が生殖に結びつかないすべての性行為を犯罪行為と見なすようになった経緯がある。一つの考え方で多様な在り方が吸収される。

求める相手の性別に関する指向をセクシュアリティと呼ぶ。同性愛・異性愛・両性愛など、実はセクシュアリティは多様である。また「自分は女/男である」という意識が身体の性別と一致せず、「女/男である」と

いう意識を拒否し、Male to Female(男性から女性へ)、Female to Male(女性から男性へ)といったジェンダーを超えるTG(trans-gender)も存在する。さらにTV(trans-vestite)という異性装、すなわち性別的に属すジェンダーとは反対のジェンダーの服装を好む指向もある。こうしたTG、TVが暴露するのはジェンダーの構築性である。異性愛を正常とするセクシュアリティ、男女に二分されるジェンダー、そのいずれもが実はさまざまな多様性を排除・黙殺した上に成り立っている。

性自認・性的指向の在り方が多様であることを認め合って、偏見なく生活することはできないのか。「逸脱」ではなく、「多様性」として捉えることはできないのか。多様性を認めることで、自分らしさは失われない。最後に、フェミニズム・ジェンダー・セクシュアリティを研究射程に置く加藤秀一のことばを確認する。「みずからの怯えを馴致するために、そうして不安の根拠を捏造するためだけに他者を名づけ、名づけることによって消去し、そうして捏造された名を軸として、同じ強迫症の持ち主たちに呼びかける。かれらにとって名づけることは、否定すること、排除すること、殺すこととつねにともにある」²⁹。偏見を取り去ること、さらには自分らしく生きるために、「正確な情報の獲得、理解(性教育)、そこから選択」できることが必要となる³⁰。

Response

* 今回の授業でLGBTQの人々はいじめを受けたり、迫害されことがあると知り驚いた。私の親友の一人に両性愛者の子がいる。彼女は普通にそのことを私に話したし、私もそれを聞いて驚きはしたが、気持ち悪いとは感じなかったため、廊下も歩けない程のいじめを行う人がいることや、殺してもたいした罪に問われない事例があることに衝撃を受けた。自分が“たまたま”異性愛者で、異性愛が“たまたま”多数派だったというだけで、なんらかのきっかけで自分が少数派にいたり、または今後入ることだってあるかもしれないのに、よくそんなことをして平氣でいられるなと思った。

* 愛にはいろいろあるが、その中でも対象が違うと意味が変わってしまうのだろうか。授業では、異性愛・同性愛・両性愛と出ていたが、それより詳しく見るとさまざまなものが出てくることは明白だ。同性愛や両性愛、ましてや異性愛にも明確

な判定基準なんてないのにどうやって人はそれを分けているのだろう。もし男同士がだきあっているのがゲイカップルだという人に「じゃあマラソン大会で1位で完走し終わった後にだきあう友人同士はゲイカップルなのですか」とでも聞いてみたい。おそらくその人はより細かな状況でゲイカップルを定義づけすることだろう。また、多様性にしてもそのカップル同士がどこまで望んでいるかにもよる。SEXには子孫を残すのと身体的コミュニケーションの意味があるとどっかで読んだ事がある。そのカップル同士がそれを望んでいるのなら自然な流れだとは思うが。かならずその人たち[同性愛者]はSEXをしていて、誰でもおそてくる人物と、深いところでとらえているのではないか。だからこそ。そういう人物が増えたり、表面化する事をいやがっているのではないかと思う。そんな人をおそって性的衝動を得ようとする人は犯罪者であり、ゲイやレズビアンとは違うのだが、両者を混合して考えられている一面もあるのではないかと思った。(〔 〕筆者補足)

* LGBTQに対する風当たりはあまりにも強い。それは今回の映像や資料からさまざまと感じられた。生殖という本能に裏打ちされたものだとても、人を殺すまでに至るその嫌悪はどこから来るのだろうか。その人自身は同性愛者ではなく、ただの同性愛を研究しているだけで迫害を受けている人もいると聞く。性の多様性を認められない人達の多さに愕然とする。

* 小中高の12年間、「あなたしさを大切にしなさい」「個性は尊重されるべきです」そう教えられてきた。おかげで今の私は、きっと個性的な存在になれているのだろう。では、私にそうやって「らしさ」や「個性」を促してきた大人たちは何を「個性」として教えたのだろう。率先してまとめ役にまわること。人前で物おじせず堂々と話せること。絵が好きなこと。これらのことが私の持ち合わせている「個性」の一部だとして、果たしてそういうことを「個性」として良いのだろうか。少なくとも、大西賢示さんのような個性があることは、誰も教えてはくれなかった。

セクシュアリティだけではなく、それまで違和感を

覚えていた「他者」を理解し肯定することは、自己の肯定へと至る。

*自分の目で見極めたい。自分の人生の大切なもの。自分で選んでいい、他の人と違ってもいい、その人もその人らしく生きていけばいい。弱くて、怖がりな私でいいんだと、今は思っています。そんな私にもできることがあると知ったし、大切にしてくれる人が周囲にいるので、子どもの頃よりもずっと自由だと感じて毎日生きています。

そこに自分の「生」を見つめる学生がいる。もちろん「嫌悪」は容易に取り除かれるものでもない。授業後にも変わらないコメントが来る。

*同性愛、人としてどうなのか？

(9) Drag Queen—当事者が語る「性の多様性」

特別講師はドラッグクイーン一派手な女性用のドレスを纏い、パフォーマンスをする男性‘エスマラルダ’である（図資料22）³¹。授業はドラッグクイーンの装いでなされた。

Keywords

- ① LGBTG ② バイセクシュアル
- ③ ドラッグクイーン

Target

ゲイであり、ドラッグクイーンを演ずる人との直接的なふれあいを通して、同性愛当事者の気持ち、さらに性の多様性についての理解を得る。

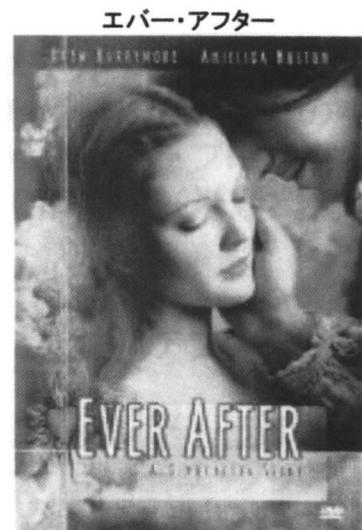
Materials

- ① 村本篤信講師作成のレジメ
- ② DVD ドラッグクイーンパフォーマンス
- ③ ドラッグクイーン実演

第1ステップは、自己紹介から、簡単な言葉の説明（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、トランスヴェスタイル、ニューハーフ、アセクシュアル、ドラッグクイーンなど）をする。次のステップでは、「ライフヒストリー」と題して口唇口蓋裂という障害を持って生まれたこと、同性愛を自覚した子ども時代、はじめてゲイの街と言われる「新宿二丁目」を訪れた時、親や友人へのカミングアウトと母親の反応などを赤裸々に語った。さらに「同性愛者というカテゴリーはいつできたか」「カテゴリーへの区別・排除」「ゲイ同士の仲間意識・アイデンティティ確立・開き直り」を、当事者として話した。最後のステップでは、ゲイも異性愛者も多様であることを確認した。異性愛と同性愛という区分などは意味がなく、性そのものが多様であることを実証するわかりやすい語りで



図資料22 ドラッグクイーン(講師は向かって左)



Links: [Official Web Site](#)
Trailers: [Real Video](#)

図資料23 知力と体力のシンデレラ

あった。さらに世間の差別に触れながらも、現在「ゲイである自分」を楽しんでいる姿を石川さゆりの「天城越え」の舞のなかに見せた。質疑応答では、「友人からの同性愛者であることの告白にどう向き合つたらいいのか」といった質問があり、「特別に構えず『そうなんだ』と受け止めてあげてはどうか」と回答があった。授業後は研究室を開放した。座りきれないほどの学生が訪れ、彼を囲んでいろいろな質問をした。自分がエイセクシュアル（性欲欠如）であると感じている学生、TGである学生、同性愛者のセックスに興味を示す学生など、さまざまであるが賑やかな輪が作られた。

Response

*我々がゲイに対してどれだけ先入観やイメージだけで異なった人物というレッテルをはっていたかということがわかった。

*性別を超えた人一人としての人生を、少数派が多数派だから正しい生き方というのではなく、その人のあり方や生き方を認め合うことのできる心の大切さを投げかけてくれた。

*世の中にはいろんな種類の性の人がいるということを自身を含め話していただいた。ドラッグクイーンという派手な衣装を身にまとって演技をしている姿は自信にあふれ、自分の個性を大切にしているように見えた。自分の個性を自分で認め、自信を持ってアピール出来るということは、自分を認めてあげることの出来ない人にとってすごい元気をもらうことが出来る。

*はるな愛と同様に、彼女もまた現在の抑圧の多い社会の中で自分の思うままに自由に生きている強い人である。彼女の話を聞けば、彼女が何か社会に対して悪いことをしている悪い存在でない事や、彼女の過失によって彼女が彼女である訳ではないという事がよく分かる。彼女は講演という形を通じて性的マイノリティは普通の人であるという当たり前のはずなのに中々気付かない事を伝えてくれた。

*「自然に振るまえば怒られると、誰も言わないのにわかっていた」と言っていた。ここでも同性愛・両性愛を変態扱いし、区別しようとして、個を個として認めようとはしない社会のありかたがみえた。

*自分がゲイであるということを隠さず、それを逆に強調する形で世の中に発信していくことは、社

会の中にはいろんな性があるということ、どの性であることが正しいなんていうものはないんだということを、世間に認知させていくことにつながるんだと感じた。

*一般的にホモセクシュアルと呼ばれる彼だが、心に残った言葉は「私たちよりも現代のAV（ダルトビデオ）のパッケージの方がよっぽど変態だと思う」という一言。様々な性への欲求がある中で、なぜか様々な性のありようは認められていなし。わたしたちにできることはもしそうした人に出会った時に、その人の存在を否定せず認めることである。

*男性だから男らしい姿をして、女性のことを好きで…というのは一例にすぎない。自分が自分らしいられる姿を表現していくべきだ。

*ショーパブに行ったことがない上、本物のドラッグクイーンにも会ったことがなかったのでひじょうに貴重な体験だった。緊張しながら講義をしてくださる彼女はとても美しく、尊敬の念を抱いた。エスムラルダさんは「同じ境遇の人に希望を持ってほしい」とおっしゃっていたが、確かにエスムさんにならできると思った。

*エスムラルダさんは、特別講義の最後に、わくに捉われずに、一個人として生きていきたいと話されたのが特に印象的だった。彼を通して、ジェンダー・センシティブの考え方の重要性を感じることができた。男らしさ・女らしさといった事に、極たんに、肯定も否定もせずに、一人一人の自由な生き方を、社会でくくりつけるのではなく、もっと柔軟性を持って、多くの人と他者理解をしていく必要がある。

これらの感想から何が読み取れるであろうか。一つは多少なりとも同性愛者へのまなざしに変化が見られたこと。二つはゲイとして生きる姿から、「自分らしく生きること」の勇気と大切さを学んでいることである。これらは村本氏が放った強烈なインパクトの力に他ならない。同性愛の自認、家族への告白など、正面から学生に向かい話す姿勢には迫力があった。いつも以上の学生の生き生きとした感想がそれを物語る。

しかし一方で、「あかるく、おもしろい」エスムラルダのパフォーマンスだけに目を奪われ、本質的な問題

が見えなくなってしまう学生も少なくない。「あれだけ楽しそうなのだから、何も問題ないじゃない」と、当事者として悩む学生への励ましというエスムラルダの真意が十分に理解されてはいない。この点に関しては、後日さらに考える機会を設けた。

(10) 真実のジェンダー・フリー —ジェンダー学が見せる「生」

Keywords

- ① 自立 ② 同性婚 ③ ジェンダー・フリー

Materials

- ① 映画 *Ever After* ② ドラマ *Around 40*
- ③ マンガ『ルネッサンス』

Target

真実のジェンダー・フリーが実現できる未来像を探る。

Presentation

2部に分けて行う。第1部では映画を用いて、シンデレラ・コンプレックスからの脱却を提示する。第2部では、ドラマを用いて両性の生き方を、またマンガから多様な性愛の在り方を見せる。

1) 「美しさ」の誤解

1998年のアメリカ映画で、レオナルド・ダ・ヴィンチも登場するこのフィクションは、中世16世紀のフランスを舞台としているため、その景色・建造物などは非常に美しく、この面からも芸工大生の興味を引く資料である（図資料23）。

ストーリーの概略は以下である。ダニエル（シンデレラ）は幼い頃に母を亡くし、父は男爵夫人と再婚後急死する。それ以来ダニエルは、父の財産をわがものにした継母と連れ子の姉妹にメイドとしてこき使われ、虐げられる。そんなある日、ダニエルはフランスの王子ヘンリーと出会う。ダニエルに恋したヘンリーは、スペイン王女との政略結婚を望む王フランシスの反対を押しきり、舞踏会に彼女を招待する。亡き母伯爵夫人の名を名乗ってしまったダニエルは今の境遇を告白する機会を失い、継母にメイドであることを暴露される。傷ついた王子は彼女から離れ、ダニエルはまたもとの生活に戻り、さらに金でダニエルを得ようとする商人のもとへ売られてしまう。しかしダ・ヴィンチの助言などにより、真実の愛を貫く勇気を得た王子はダニエルの元に向かう。ダニエルは王子に助けられるの

ではなく、自分で商人と戦い、囚われの身から脱出する。再会を果たした王子はダニエルに彼女が舞踏会で落としていたガラスの靴を履かせてやり、ふたりは末長く幸せに暮らした。

このシンデレラはあのシンデレラではなかった。父の教えにより多くの書物に親しみ、また父から剣術も学んでいた。そのため王子の高慢な考え方には反論し、国や統治者の在り方を意見する。ジプシーに襲われても、シンデレラの知恵と勇気が王子を救う。悪徳商人にも自らの剣を持って立ち向かった。一方で王子はむしろどこか頼りない。美しい中世の街を舞台に映えるのは、他者に依存するのではなく、自分の考えをしっかりと持ち、意見を述べ、知力も体力も備えた女性であった。あの従順で美しいシンデレラとは異なる「生きた」美しさを画面に広げた。

2) 誰もが人生を謳歌できる社会へ

第2部では、マンガとドラマという親しみやすい資料から女性の生き方・性別役割、セクシュアリティに関する新たなメッセージを検証する。マンガ『ルネッサンス』は思い込みをさらりと壊す。

〈図資料24〉に載せたのは、男性2人が「職場結婚でーす」といい、「あんたはぜったい同性結婚すると思ってたぜ」「あたしも結婚するなら同性がいいなあ」と続く場面である。漫画家秋里和国の発想は、軽妙に「枠組み」を飛び越えてみせる。女性漫画家、少女漫画ファンの多い教室では、興味を引き付けるマテリアルとなる。

もう一つのマテリアルは2008年4月より6月までTBSで放映された『金曜ドラマ Around40～注文の多いオンナたち～』の最終回の一部である。口頭でそれまでの粗筋を説明した後、登場人物がそれぞれ選択した生き方を示す（図資料25）。脚本家橋部敦子は、主人公の女性を医師に設定し、男性の恋人をエコに拘る臨床心理士と設定する。まずはよく見られる男女の職業の格差を逆転させる。そして主人公は結婚して男性の許に行くより、病院院長として、地域市民のための誠実な医療実践に取り組む道を選択する。自分のやりがいを男性のために犠牲にはしない。それは智恵子の苦悩であった。主人公の友人は専業主婦であったが、自分なりの働き方で仕事のやりがいを見出していく。その夫はリストラにあってはいたが、「男のプライド」—



図資料24 補助プリント『ルネッサンス』

「扶養してやるんだ」という呪縛からやがて解放され、家事を分担し、妻との新たな関係を築いていく。主人公の父の再婚相手は事実婚である。細部にわたり、橋部は新たな提案を投げかける。性別を超え、誰もがやりがいのある仕事を受けられる。そこに「生」は生き生きとした姿に変わる。

そしてこれまでの「知の攪乱」から足元の現実へと視線を移しながら、授業のまとめをしていく。

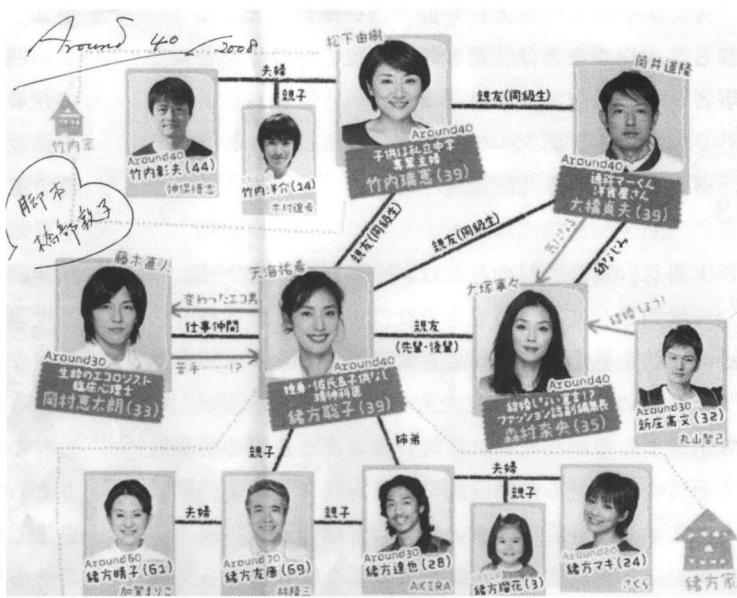
① 真のジェンダー・フリー

それぞれがジェンダー規範や抑圧から解放されることが必要である。社会的に構造化された固定的なジェンダー意識の切り崩しは、いまだ課題として残っている。Hidden Curriculumなど、教える側もgender sensitiveであることが求められる。女性の自己主張能力・経済的自立意欲の養成、一方で男性のケアや家事への参加による「思いやり」、生活身辺能力と対人能力の獲得が求められよう。そこに新たなパートナーシップが生まれる。

② 弱肉強食の克服

健常で異性愛である成人男性主導の社会が続く限り、人間性豊かな環境と調和した地球を再生することはできないだろう。

③ 新たな労働



図資料25 補助プリント「ドラマ Around 40」

従来は男性が長期正社員・終身雇用・年功序列型であり、女性は結婚退職して子育てが終わるとパートとして単純労働をするという形が多かった。能力主義やジェンダーレスが進むなかで、専門的探求心や新しいものを作り出す能力が求められている。

④ 生物学的二元論の解体

ジェンダー枠から外れた人々の苦悩や困難にきちんと目を向け、前向きな「生」を持つ機会を与えるべきである。

⑤ 法制度の中立

どんなライフスタイル・男女関係に対しても、法的な差別をしない法制度の確立が急がれる。一つの先駆的な例に1999年フランスでは、同性愛カップルにも社会的地位を認め、相続や税金、社会保険の支払い、住宅の賃貸契約などで結婚に準じた権利を認める法律連帶の民事契約PACS (Pacte Civil de Solidarité) が誕生している。また2000年オランダでは同性愛者の結婚が認められている。

そして本授業のまとめを、わかりやすいことばで提示する。

1 :「女・男だから」ではなく、「女・男でも」

2 :性別にあるのは「境界線」ではなく、gradation

3 :美醜に囚われず、その人の「佇まい」を見る

- 4：人を傷つける言動を許さない—自他の尊重
- 5：大切なことは、他者のために心を碎くこと
—caring

3. 意義

本科目『多性研究』の意義は、第一にジェンダー論、新たな学問として発展してきた女性学・男性学の紹介にその意義を見出すことができよう。ジェンダーバックラッシュのなかで、学生たちは予想以上に「らしさ」を追究する傾向が見られる。ジェンダー規範の構築性とそこに発生する性別役割やセクシュアリティの問題を考えさせる意義は大きい。

第二は、これまでとは異なる斬新な視点によって既成概念を壊していく知的刺激—知の攪乱を学生に見せることができる。そこでは「答えのない」問い合わせ合い、自ら「思考する」ことが求められる。

第三は、「性」を考え、語る場を提供していることである。

*性の多様性というのは、私にとってどうしても無視できない。私自身両性愛者だし、周囲にもTGの人がいる。私は幸いなことに、理解ある友人たちに囲まれて生活してきたので、イジメなどは受けなかったが、あまりよく思っていない人もいただろう。現在ボーイズラブやガールズラブというのは同人誌などで広まり、携帯サイトのバナーにまで載っている。これは、多様な愛についての理解者が増える一方で、より差別を深めているように思う。というのもマンガの中だけなら同性愛は認めると、現実の同性愛はキモチ悪いだとか、マンガの世界の同性愛=現実の世界の同性愛と思っている人も多いのではないか。そのような誤った情報だけで多様な性を理解した気になっている人がいるなら、それは逆に失礼なことだと思う。

*過去に好きになった相手は同性でした。性別ではなく、相手を尊敬し、相手の姿に憧れ、嫉妬し、相手の思考が好きでした。当時の私の友達のなかでその人が一番魅力的だっただけ、みたいな考え方です。相手を思いやる気持ちと人間性が大事なのだと思います。

このように、毎時間のレスポンスは「性」に悩む学

生が少なくないことを見えた。

第四には、男女を問わず人生における「働く」ことの意義を確認させることである。経済的に自立していく意欲を持たせる教育は、女子学生の多い本学では肝要である。さらに労働におけるジェンダーレスが進み、そしてより環境と調和した生き方が求められる今後、創造的な仕事が求められていくであろう。そこに芸術系大学の担う役割は大きい。ひとりひとりにとって、なにがあっても変わることのない価値を発見させる。生きる目的や生きる力を学生のなかに育むことが大学教育の教養科目的目的といえよう。

そして第五は、ジェンダー学がその学問的な領域に止まるものではないことから生じる意義である。毎回のテーマが社会的な弱者に着目するため、そこに他者を思いやる心性が育まれる。他者を思いやり、解放する。そして、自らをも思いやり、解放する。

*自分はマイノリティである。これは生きたいように生きていると、自然とそうなってしまった。そのため、マジョリティから逸脱・排除の流れが身にしみてわかっている。最近考えているのは、自分はクリエイターして人権を得たということである。クリエイターやアーティストはマイノリティであることを認めてもらえる(と勝手な印象だが)と思っている。

*私にとってのリストカットは絵を描くことだった。私もしくいることを自分で許せなかった。ちゃんとしないと、もっとしっかりしないといけないと考える子どもだった。世間、家族すらも植え付けたものであろう。絵を描いているときは全てを許せた。自分の目で見極めたい。自分の人生、大切なものです。自分で選んでいい、他の人と違ってもいい。弱くて、怖がりな私でいいんだと、今は思っています。

他者理解とは、自らの生に活力を吹き込むものであることを学生のレスポンスは教える。

最後に、授業方法からの意義として「思考を書き表す訓練」と学習マナーを挙げたい。〈図資料1〉および〈図資料2〉に載せたように、レスポンスには毎時間学生のコメント、疑問、感想がびっしり書き込まれた。時間が足らず授業後も書き続ける学生の姿も少なくなかった。実際、2~3行のコメントのカードは、毎時

2～3枚で、およそ2%程度であった。しっかりと授業を聞き、論理的にもまとめられているものを紹介するというシステムも、真剣に書かせることに寄与したと考えられる。以下は学生の感想である。

*社会ではあまり見つめることができない問題を目の前で見て考えることができるとてもいい授業でした。これからもこのデリケートな問題に目を向けていこうと思います。レスポンスで自分の考えを文として書くいい機会に恵まれたなあと思いました。もっと自分の考えを言葉にできる能力が身に付くといいなと思いました。

マナーにも厳しく、遅刻・欠席にも厳しいルールを適用したが、出席で単位が取れなかった学生は120名中5名、4%である。当初見られた居眠りも中盤より皆無となった。これらは基礎教育において、学問と同様に肝要な部分をなすものであると考える。

4. 学修アンケートと授業アンケート³²

- 本稿冒頭で言及した学修アンケートが以下である。
- *今まで知らなかつた性の多様性について学べる。
 - *いい経験になった。他者理解というのは少数派の人達の生き方をどこまで理解し認め合うかの意味と大切さを教えてくれた授業だと思う。
 - *考えたこともないことについて考えさせられた。いろんなことに気づかせてくれた。
 - *新しい知識をたくさん得ることができたし、自分の固定観念や物事の捉え方もがらりと変わったと感じている。
 - *性というものを今までとは別の角度から研究し、教授の話もわかりやすく考えさせてくれて面白い。
 - *初めて聞く話や今までに考えたこともなかった内容が満載で、とても新鮮。
 - *ジェンダーや性について、個人と大衆について考える機会ができた。
 - *視点が広がった。とても面白い講義だった。
 - *ジェンダーについての講義だったが、今まで自分が知らなかつた、ジェンダーが人間にもたらす何たるかというものをより深く学ぶことができた。
 - *自分の知らない分野で、世間的にもまだまだ理解されていない事を授業で取り入れてくれたので、

考え方方が変わった。履修して本当によかった。

*今までの考え方を改める機会になった授業でした。

*知識はもちろんだが、精神面において大きく影響があった。人生や人間について深く考えさせられる内容だった。特に、普段触れる機会がない特別講師の方（ドラッグクィーン）のお話を聞けたことでより現実味が増し、人の個性についてよく考えるようになった。良い授業だった。

*ジェンダーとは何か？私は前からそう考えたことがあった。女性差別をやめろと世間では言われているけれども、男性における差別も多いのもこの授業で学んだ。さらには、性同一性障害を持った男性からの話でいわゆるそれで稼いでいる人もいるのだから、これ以上はあまり世間からも冷たい目で見ないで実態を知って欲しいと思った。

*一番初めに出席や評価は厳しいと言われたが、休みたくないくなるような授業内容だった。作られた性、中間の性、性の線引きについて新たな視点や考え方を身につけることができた。最後に教わったジェンダー・フリーではなく、ジェンダー・センシティブという言葉が印象的だった。

*大抵オムニバス形式の講義は毎回ゲストが変わる為、授業のテーマと少しずれたり良くわからない事も多々あるが、この講義は殆ど毎回興味を引くような内容であり、テーマもさほどぶれず、ゲストの話に引き込まれてしまう。

さらに最終授業のアンケートで学生の声を聞く。

*この授業を受けてまず、自分がふだんなにげなく考えていた「らしさ」というものについて考えさせられて、男と女というものがどのようなものがわからなくなり、同性愛やそれの中間の人は心に苦しみがあったとしてもそれでも明るく振まっていたことを見て、自分の中で何かどうしたらいかわからないものができてしまった。

*いくつか知れてよかつた考え方、視点、事実があり受講してよかつた。学生からの鋭いレスポンスを読むのが毎回楽しみであった。この講義の主張からは外れていても興味深い意見もあったと思うので、それも読んでみたかった。欲を言えば、もう少し時間のゆとりがあるとより深い考察ができると感じた。

- *一時間ごとに新しく気づいたことや考えができて、自分の今まで悩んできた「らしさ」についても、女らしさより自分らしさを大切にしようと考えを改めることができ、気持ちが楽になりました。多くの人の考えに触れられる良い授業だったと思います。
- *これまで私は偏見は少ない方だと自分では考えていましたが、実際には「偏見がない」のではなく、「興味がなかった」のだと感じました。本当の偏見の無さとは相手を理解（しようと）した上で出来あがってくるものだと考えます。がんばります。
- *授業を通して、自分の中にある“女らしさ”にしがみついている部分に気がついた。“女”という属性を失くして、自分がどんな人間？と問うと答えが出ない自分にがく然とした。個人差>性差という言葉が強く心に残った。日常の中で、どうしても性にとらわれてしまうが、一人一人を“性”から外してみると新しい世界が開けるのではないだろうか。
- *授業を受ける前とは多少なりとも違った視点を得ることができたと思う。ただこう言うのも変ですが、授業として多くの考えを許容するようにおっしゃっていたが、結局は全体の意見が同じ方向を向くようになっていたと思った。
- *難しいテーマだったが、授業が終わった後も毎回一人で考えていました。この授業を受けてから「決めつけ」という観点に非常にびんかんになったし、女だから○○だからということにこだわりや束ばくを感じなくなったので世界が広がったという気がした。様々な人にこういった問題を知って、考えてもらいたいと、日ごろの生活で思うことがあります。この講義を受講してよかったです。
- *私はこの授業を受けて、今までジェンダーについて関心はありましたが、私が思っていたものよりも深くもっと強く考えていかなければならないものだと実感しました。そして、この講義は自分にとってかけがえのないものとなりました。
- *差別の根本の原因は恐怖にあるのではないか？と授業を受けて思いました。恐怖の中で一番強いものはわけのわからない、得体の知れないものへの恐怖です。分からぬものにはどう反応するのかも分からず、拒絶排除してしまいます。多数派が分からぬ恐怖心から差別し、少数派が差別を恐れて発言しないままでは悪循環のままです。どうすればこの循環を断ち切れるのか、難しい問題だと思います。ジェンダーを通して自分のこと、世界のことを考えなおすことができ、とても有意義な授業でした。ありがとうございました。
- *この授業の全体を通して、私は今まで見てきた視点では180°逆の視点で見ることができたと思う。マンガ『ルネサンス』を見て、このような世界がもし訪れたら、「男だから」という理由で無視することなく、もっといろいろな人と仲良くなれるかもしれない。男女の壁を壊すことができれば、あとは、性格上だけで仲良くなれると思うと、ワクワクする。
- *そもそも「男は～」「女は～」という固定観念を持たずに生活していたつもりだったが、考え方持たない人というよりは自分なりの性に対する観念を持った人が多く、毎回授業頭の皆さんのが声を聞いて考えの視野が広がった。
- *先生の言葉に疑問を感じる時もありましたが、授業が進むにつれ非常に論理的な意味があることを知り、納得がいきました。受講前とでは考え方がずいぶん変わったように感じます。難しい内容でしたが、自分なりに理解しようと苦しました。
- *今まで何気なく生活していたが、この授業を受け、生活の中に多くのジェンダーを発見し、こんなに私達の意識や思考というものは社会や国に染めあげられていることを知り、どこまでが本当の自分が考えたことなのかわからなくなり、すごくとまどった。自分を見つめなおすとてもよい機会になった。受講して本当によかったです。これからも、するどく物事を見さだめ、自分の考え方というものを吟味し、さらに相手の考え方も理解し、生きていこうと思った。
- *正直、自分がこの授業を理解しているのかなと思い、途中でやめようかと思っていました。でも理解していきたい学問だし、本当に自分のこれからのためにつながる授業だと感じました。ありがとうございました。
- *今まで自分が心や頭に芽生えていた「優劣」が、

いかに程度の低いものだったかをこの講義を終えた時思い知らされました。それと同時に自分もその「優劣」の中に自分で身を投じていたことに気付かされ、もっと「自分」であっていい、「自信」を持っていいんだと感じました。この授業は本当に心の幅を広げさせてくれるいい機会になりました。ありがとうございました。

*私は芸術やデザインで人々がわかり合えるようにしたい。そう思ってこの道に進みました。中・高も、同級生と関わる中で、いじめ・偏見・差別を見てきて、「どうしたら、他人を理解しようと思わせられるのか」とずっと考えていました。他者理解とは、この授業のテーマであり、様々な人のあり方を見ていく中で、本質や自分自身、気をつけなければいけないことを学べたと思っています。

*他者理解、ジェンダーは、人にとって、必要なものだと真に感じました。私にとってこの講義で心を動かされたことが2度あります。視野を広く応用がきく考えをしようと考える私は、グラデーション、2極化しないというものがとてもしうげきでした。もう一つは誰か身近な人一人を変えられたのなら、あなたがジェンダーを学んだ意味があるという山口先生の言葉でした。どうもありがとうございました。

*一言とっても良かった。とても難しかったというのもまた事実だが、毎時間ごとに、自分がいかに偏見を持っているかがわかった。このようなテーマにおいて、他の学生、特に男性の意見が聞けたのは、間違いなくプラスであった。特別講師の方を含め、あらゆる視点から見る姿勢ができていた。同時に自分の足らなさを感じた。まだまだ見えていないもの、聞こえないものがあるのだと思う。決めつけがちな、自分にも疑問を持った。

*とても難しい授業でした。しかし、生まれてはじめて、人間というものに正面から向き合った気がします。男、女ではなく、その人個人の“生”を見つめることの重要さを、この授業を通して知ることができました。他者の傷みを知ることで学んだ事は、私は一生忘れないと思います。また、ここで学んだ事を誰かに伝えられたらとも思います。

*『性』というものは、いつまで考えても、どんな

に考えても、最終的なところまで辿りつかないもののかな、と感じました。

*とても難しい内容でしたが、最後の講義で「世の中を変えようとするのではなく、身近な周りの悩んで苦しんでいる人、一人の人生を支えることが出来るのなら、それは凄い事だ」という山口先生の言葉で、この講義の意義、必要性をとても感じました。一人の人生を支えることが出来たなら、それは、本当に凄い事だと思います。

*一人のセクシュアルマイノリティとしてこのような授業がありますと、とても大学生活が送りやすくなります。まだまだ名簿やトイレに関して、事務員の無理解などで生きづらさを感じることは多々ありますが、前向きになれた気がします。今後は更に私たちのような人間が必ず身近にいるということを感じさせる内容を入れていただけたらと思います。

*初めは授業についていけるか不安でした。でも講義が進むにつれ、“ついていこう”という気持ちが日に日に増していたように思います。

*自分は自分の今までなくて、無理に男性も女性も性の対象にしなくてもいいのだと思えてきました。辛いことも多いけれど、少しほっとしました。とてもありがとうございます。

*授業を受けて本当に良かったと思える授業だった。授業を受けたことにより、日々の生活で、以前は考えることがなかったであろうことを考えるようになった。何かにつなげたい。何ができるのか。言葉にしてみようかと思う。

*果して自分がこの授業で学んだことをどれくらい理解し、これから的人生でどのように活かしてゆけるのかはまだ分かりませんが、身近なところで言えば「男なんだからしっかりしてよ」「男のくせに」などという言葉を言わないように心がけるようになりました。そういう小さなことから変わってゆけたら良いのではないかと思います。

*自分が「らしさ」にとらわれていること、CMやマンガなども「らしさ」の観念にしばられていることを知りました。メディアや周囲にふりまわされるのではなく、私も『今を自分らしく生きたい』と強く感じることができました。私は将来に悩みを

- 抱えていたため、この言葉でとても楽になりました。
- *私はこの授業を受けて衝撃ばかり受けっていました。悩んでいる人の生の声やよくよく見るとおかしなCMや映画や童話、私は刷り込まれていることなど、全く気にせず生きてきました。勿論、当事者になつたり周りにこの社会で生きづらそうな人がいなかつたからです。この授業はそんな思考もせずに受け入れるだけだった私に大きな石を投げてくれました。気付きと知性の石です。石を投げて下さった先生に感謝です。ありがとうございました。
- *専門用語が多く、大変でしたが、専門的な知識とは別に、新しいものの見方、考え方を知ることが出来ました。私が誰か一人を理解し力になれる様努力することが世界をより良くするための第一歩だと思います。今、芸工大から輪が広がりつつあると思います。
- *男女差別、ジェンダー、セクシュアルマイノリティについて以前から興味があったものの、表面的にしかとらえていなかったことを実感した。授業を受けて、何気ない会話で、「男だから」「女だから」と聞くと、「今の発言はどういう意味かな」と考えるようになった。とても得るものがあった授業だと思う。
- *以前、同棲している彼女と彼氏の会話を書いた者です。あれは私自身の話でした。この授業の話をしていたら、彼が考え方をあらためてくれました！そして次の扉へと彼らを導く。
- *いろいろな手段を使って「表現すること」を学ぶ私（たち）が、この講義を受けたことで、世間から自分の目で見る力、その考え方のエッセンスを少しでも手に入れることができたと思います。これからはそれを自分の作品の中で生かしていく番だと思いました。
- *今までの22年間女性として女性の視点から社会や人、ものを見てきた私ですが、レスポンスを通して男性の方と意見交換ができ、また同性愛者の方の生の声を聴いたことで様々な視点が開けてきました。私が学ぶグラフィックデザインという分野も他者を考えることがとても重要な分野なので、専門の上でもとてもよい勉強をさせていただいたと思っています。

扉の向こうには、それぞれが選択した専門の学問が待っている。ここに教養科の意義を見出す。

おわりに一まとめ・今後の課題

今後の課題として考えるのは「わかりやすさ」である。内容・資料の整理・精選、説明の工夫に関してさらに検討しなければならない。これらによって、学生からもコメントがあった「考える余裕」を与えることも可能になるだろう。また学生の興味・関心をより喚起するようなマテリアルの準備を心掛けていかなければならない。さらに学生の感想にあったように「一つの方向を向かせている」という印象を与えないように、理論や考え方の提示の仕方も今後の検討課題であろう。

「ジェンダー」という言葉の使用を避けた方がいい」といったまるで風評のごとき発言の誤解を是正し、ジェンダー教育の真の意義と目的を示すことに本稿が多少なりとも貢献できればと願う。

この原稿を書いている今、2年目を迎えて、定員増により受講生はおよそ200名となった。より多くの学生とともに「生」と「性」を考える空間を共有し、彼らが生きる力、生きる目的をそれぞれ見出し、専門分野での学習意欲の喚起に寄与できるような科目としていきたい。そこに教養教育が担う肝要な役割を再確認して本稿を閉じることにする。

最後に本授業に対して、教学事務室の亀山博之氏に多大な支援を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

註

1. スコット、ジョン・W (2004年)『ジェンダーと歴史学』24頁 荻野美穂訳 平凡社。
2. 宮崎ますみ (2009年)「はじめに—境界線を問い合わせる」『差異を生きる』宮崎ますみ編著 明石書店。
3. 加藤秀一 (2005年)『図解雑学ジェンダー』ナツメ社。若桑みどり (2003年)『お姫様とジェンダー』ちくま新書。
4. 以下の文献よりプリントを作成。町田美千代 (2006年)「他者の痛み、わたしの痛み—関係性を築くために」『ジェンダーの視点から社会を見る 出会い 気づきつながりへ』 ジェンダー・学び・プロジェクト編 (社)部落解放・人権研究所。風間孝・河口和也 (2010年)

- 『同性愛と異性愛』 岩波新書。
5. 『世界名作アニメーション第3話 シンデレラ』 トヨタ・ヴィジョン、2007年。2007年11月6日より2008年3月18日まで岐阜放送にて放送。
 6. 伊藤公雄他 (2002年) 『女性学・男性学』 23頁 有斐閣アルマ。
 7. 前掲『お姫様とジェンダー』 37頁。
 8. 伊藤公雄 (1993年) 『〈男らしさ〉のゆくえ』 新曜社、(1996年) 『男性学入門』 作品社、(2004年) 「メンズリブと歴史認識」『情況』 11月号、(2001年) 「少年「凶悪」事件と〈男らしさ〉」季刊『女も男も』 7月。
 9. フーコー、ミシェル (1986年) 『知への意志』 渡辺守章訳 新潮社。
 10. バトラー、ジュディス (1999年) 『ジェンダー・トランセフェミニズムとアイデンティティの攪乱』 竹村和子訳 青土社。
 11. 高森朝雄・しばたつや (2000年) 『あしたのジョー①』 講談社。
 12. 弘兼憲史 (2003年) 『課長 島耕作』 講談社。
 13. 千葉大学大学院人文社会科学研究科特別研究員である渡部氏の著書『〈少女〉の社会史』は、「女性史青山なを賞」を受賞している。
 14. 小山静子 (1991年) 『良妻賢母という規範』 効果書房。深谷昌志 (1998年) 『良妻賢母主義の教育』 黎明書房。
 15. 内田雅克 (本学では新姓「山口」を使用) (2010年) 『大日本帝国の「少年」と「男性性」 少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア』 明石書店。
 16. 『少年世界』は日清戦争の戦勝気運高まる1895年1月、巖谷小波を編集主筆として、博文館より発刊された。小学生から中学生までの幅広い読者層を獲得し、当時最大の発行部数を記録した。
 17. 『日本少年』は1906年1月に実業之日本社より発刊された。有本芳水の抒情的・感傷的な歌の連載は絶大な人気を博し、『少年世界』の発行部数を超えていった。
 18. 『少年俱楽部』は1914年1月に大日本雄弁会講談社より発刊された。「おもしろくてためになる」をモットーにする娯楽・教育雑誌であった。1930年代には、「のらくろ」や「少年探偵団」などの人気作品により圧倒的に少年に支持される雑誌となった。
 19. 奥秀太郎監督がイラスト・アニメーション原画などの作家として活躍する古屋あきさを起用して作成した。静止画とナレーションから成り、美しい画と落ちていたナレーションにより、文芸作品をアート映像としている。
 20. 海老原暁子 前掲『雑学ジェンダー』 46頁。
 21. VAWW-NET Japan (2000年) 『「慰安婦」戦時性暴力の実態Ⅱ 中国・東南アジア・太平洋編』 緑風出版。
 22. 熊谷伸一郎 (2005年) 『金子さんの戦争—中国戦線の現実』 リトルモア。
 23. Wam第7回シンポジウム (2009年7月4日、於早稲田奉仕園リバティーホール) 講演記録。
 24. 小林美佳 (2008年) 『性犯罪被害にあうということ』 朝日新聞出版。
 25. はるな愛 (2009年) 『素晴らしい人生』 講談社。
 26. 2006年アメリカ制作、監督キャサリン・リントン作品。オノ・ヨーコ、シンディ・ローパーなどのミュージシャンたちの1年にわたるアルバム制作の様子を映画化したドキュメンタリー。性的マイノリティが安全に楽しく学校生活を送れる学校創立の資金援助として、アルバムを制作した。4人のLGBTQの生徒たち（2人のレズビアンと、1人のゲイと、1人のトランスジェンダー）の葛藤、家族や周りの人々との関係、そして自分という存在を肯定する様を映し出している。
 27. 前掲『同性愛と異性愛』、125頁。
 28. ハーヴェイ・ミルクは、1977年、カリフォルニア州サンフランシスコ市の評議委員に当選する。同国で初めて、自らがゲイであることを明らかにして、選挙で選ばれた公職者であった。しかし、委員就任1年にもみたない1978年11月27日、同市庁舎内で同僚委員のダン・ホワイトにより、ジョージ・モスコーネ市長とともに射殺された。この事件の裁判で、ホワイトはわずか7年の禁固刑を宣告され、この評決に激怒した同性愛者がサンフランシスコで広範囲にわたる暴動を起こした。
 29. 加藤秀一 (1996年) 『性現象論』 296頁 効果書房。
 30. 針間克己 (2003年) 『一人ひとりの性を大切にして生きる』 22-23頁。
 31. エスムラルダこと村本篤信氏は一橋大学社会学部を卒業後、編集者を経てフリーライターとなる。携帯サイト、雑誌『CDジャーナル』『フォアミセス』等にコラムや漫画原作を執筆している。東京都の公認大道芸人でもある。著書には、ペンネーム森村明生の名で『英語で新宿二丁目を紹介する本』(2008年ポット出版)がある。
 32. 学修アンケートはネット上で毎年度末に全学生を対象に実施されている。授業アンケートは授業の感想を書かせた。いずれも無記名である。

執筆者

山口=内田 雅克
 YAMAGUCHI=UCHIDA, Masakatsu
 芸術学部/教養教育センター
 Center for Liberal Arts (School of Art)
 教授
 Professor